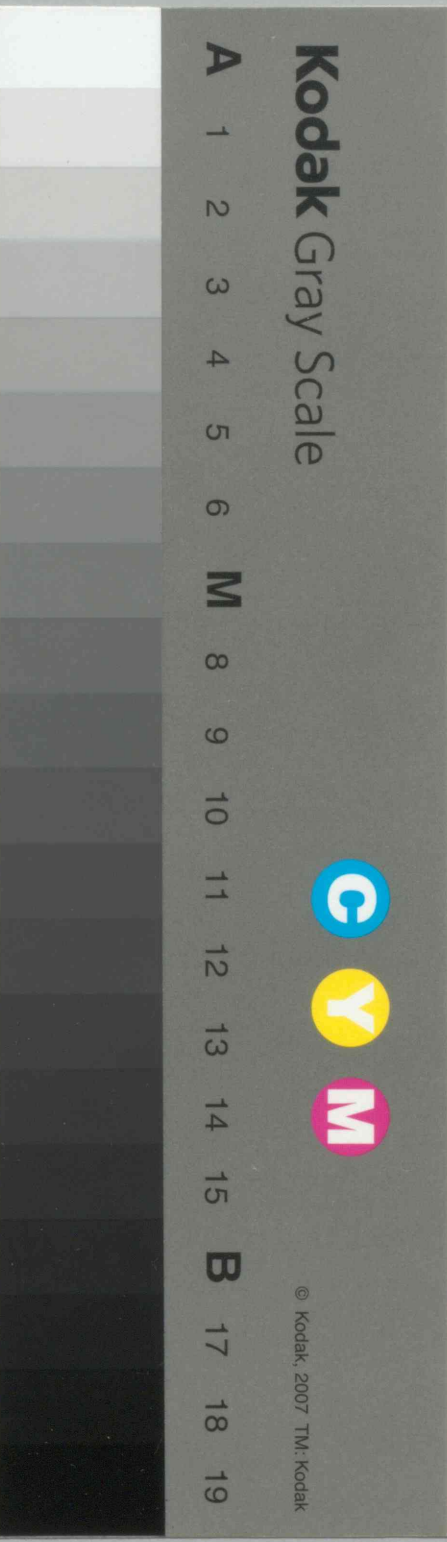
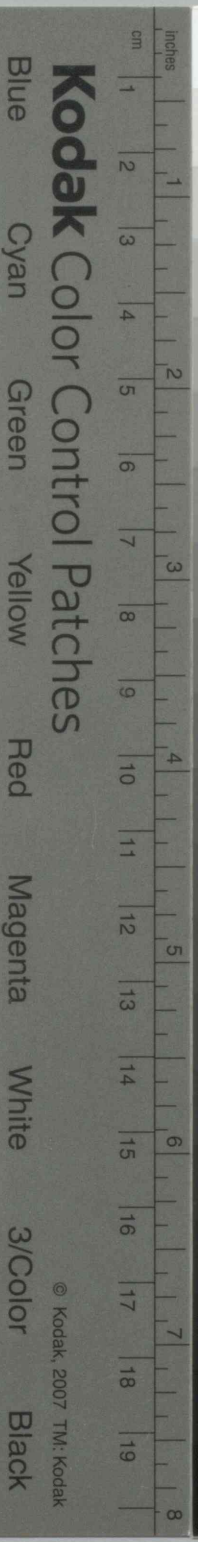
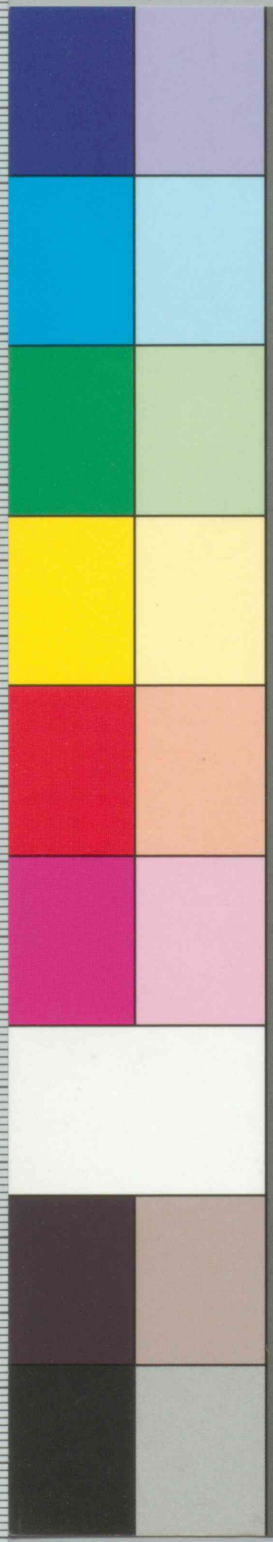


改制中等新國文卷二

375.9
Mi25
資料室



41771
教科書文庫
4
810
41-1935
200030
2286



資料室

378.9
Miz

文部省檢定

中學國語教科書
中學國語教科書
昭和十年十月二十九日

改訂中等新國文



編纂者	文學博士	三矢重松
補訂者	國學院大學教授 御歌所寄人	鳥野幸次
補訂者	文學博士	折口信夫

株式會社
文學社



〔照參課五十第〕

暎

朝

廣島大學
圖書印



例言

一 本讀本は、國語教育が擔へる重大なる使命に鑑み、國家的精神の昂揚と民族の自覺の上に、大いに裨益せんとするを以て、教材選擇の主眼とす。

一 本讀本は、現代文を中心とし、各時代の各種の文體に互りてその代表的作品を網羅し、學年の程度に應じて配列を鹽梅し、以て國語常識涵養の徹底を期す。

目次 (卷二)

★ 聖徳を仰ぎて	二 荒芳徳	四
① 五十鈴の流	河野省三	一七
★ 國境	北原白秋	二六
④ 蟲の音	沼波瓊音	三三
⑤ 果物の味	正岡子規	三五
⑥ 柿二つ	高濱虚子	四〇
⑦ 造化のたくみ	土井晚翠	四九
★ 海濱の草	柳田國男	五五
⑨ 物識り五郎助	藤澤衛彦	五九
⑩ 吾輩は猫である	夏目漱石	六七
⑪ 森の繪	吉村冬彦	七四
⑫ 天徳寺琵琶を聴く	松平定信	八二

⑬ 豊太閤	矢野龍溪	九〇
⑭ 史傳を読むべし	大町桂月	九八
⑮ 大海の日の出	徳富健次郎	九九
⑯ 初まゐり	齋藤茂吉	一〇三
⑰ 甕わり柴田	湯淺常山	一〇八
⑱ 長四郎の不敵	新井白石	一一三
⑲ 茶話	薄田泣菫	一二六
⑳ 花咲爺	武者小路實篤	一三三
㉑ 藤樹先生	橘南谿	一三三
㉒ 縮むものの力	相馬御風	一四四
㉓ 雲萍雜志抄	柳澤淇園	一五三
㉔ 樂訓	貝原益軒	一五九
㉕ 國語尊重	伊東忠太	一六〇

附 録 國語のアクセント



一 聖徳を仰ぎて

二 荒 芳 徳

天皇陛下には、明治三十四年四月二十九日、赤阪東宮御所に於て御降誕遊ばされました。それは晴れ渡つて一點の曇りもない大空に輝く星辰が、御庭の池水に影を浸した午後十時十分の事でございました。

五月五日、時の侍従長徳大寺實則侯は、明治天皇の御旨を奉じて、御所に伺候し、「みちの通宮裕仁」と御命名の御儀は擧げさせられました。

時の宮内大臣田中光顯伯は、明治天皇の御内意を承つて、徳大寺侯と共に、此の大皇子御養育の任に當る人の選定について、慎重に熟議致した結果、川村純義伯を擧げました。

二 荒 芳 徳
明治十九年愛媛縣に生る。伯爵。貴族院議員。

天皇陛下 今上天皇。
明治三十四年 皇紀二五六一一年。

從一ジニッ

川村純義 海軍大將。伯爵。
舊鹿兒島藩士。明治三十七年歿、年六十九。

獵一レフ

伯はこの大命を畏みて以來、唯一の娛樂であつた銃獵すら廢して、たゞ一筋に皇孫御養育の任に當つたのでございます。



村邸より、皇孫御殿に御移りになりました。爾來同御殿で木戸孝正侯が主として御養育申上げましたが、翌三十八年秋には東宮侍従丸尾錦作氏が御養育掛長として御傳育の任

明治三十七

年の秋、川村伯

薨去後、程なく

陛下は四年間

の御舊居であ

つた麻布の川

挿繪 學習院初等科御在學

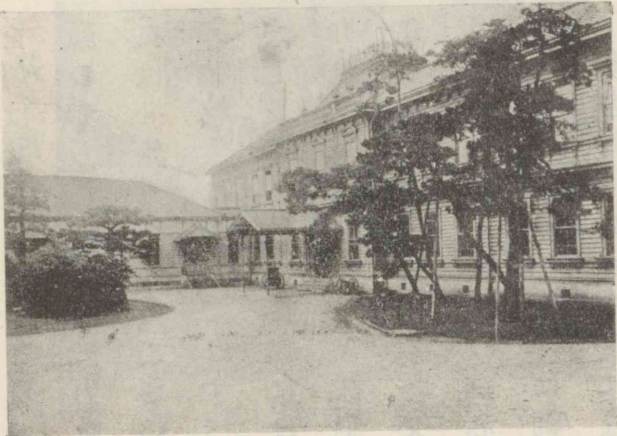
時代の今上陛下。

に當つたのでございます。
 かやうにして明治四十一年四月御齡八歳で學習院初等科に御入學遊ばされました。當時の院長は乃木大將で、陛下の御教育に身を以て當られました。御同級には華頂宮博忠王殿下、久邇宮邦久王殿下が御在學中でございました。陛下には御在學中は皇孫御殿より御徒歩で毎日、四谷仲町の學習院に秩父宮・高松宮の御弟殿下と、お手をとらせ給うて御通學になつたのでございます。

乃木大將のことを「院長閣下」と呼ばせ給ひ、御學友に對しても極めておやさしく、若し病氣などで缺席する者がありました場合は、いたく御心を悩ませられ、後日登校の節は必ず「もうなほつたか」といふやうな有難い御言葉を賜はる

乃木大將 名は希典。陸軍大將伯爵。大正元年薨、年六十四。
 華頂宮博忠王 伏見宮博恭王殿下の第二王子。
 久邇宮邦久王 久邇宮邦彦王の第二王子。大正十二年臣籍に御降下せられて、久邇侯爵。
 秩父宮 雍仁(ヤスヒト)親王。明治三十五年六月二十五日御誕生。
 高松宮 宣仁(ノブヒト)親王。明治三十八年一月三日御誕生。

のが常で、その都度御學友は眞に身にしみて有難く存じあげたのでございます。
(孝行)



の御日課をお修めになるのでございました。規律正しくあ

挿繪 御在學當時の學習院初等科。

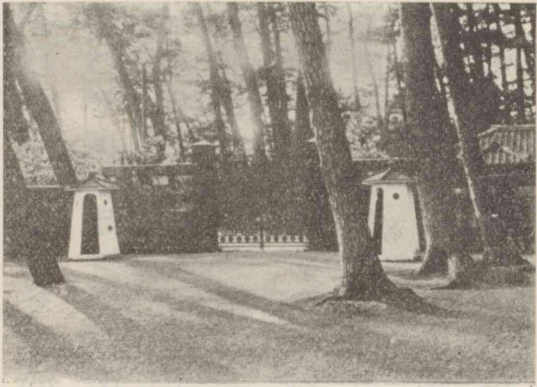
修一をさむ

らせられたことは、毎日御使ひ遊ばす御机も近侍の者の手を煩はせられることなく、御躬ら布巾をお持ちになつて、御顔の赤らむまでも御力を入れさせられて、ごし／＼と押し拭はせ給うたのでございます。

御學業については、すべての科目に御熱心であらせられました。が、わけて博物には御興味をお持ち遊ばしまして、魚介・鳥獸・草木・鑛物を御採集になり、これを一々御躬ら御分類御整理遊ばされました。又求知心に富ませられまして、御散策の時、さへも常に御心を學問に御注ぎになりました。一例を申しますと、沼津に御轉地の際、たま／＼桃郷附近に在る凱旋記念碑を御覽になつて、小さな御手帳をポケットから御取り出し遊ばして、碑文中のやさしい漢字などを御樂

給うた

沼津 静岡縣沼津市。その市外の桃郷の靜浦海岸に御用邸がある。



しげに御書取になつたことがございました。それ故學校で御習得の漢字なども字畫正しく御記憶になり、そして又よく之を御使用になりました。陛下の御記憶力の勝れさせ給ふことは、御幼少の時から既に人の驚歎し奉る所でありまして、學業課程に關しては勿論、他より聞かせられた談話等もよくそれ／＼御記憶になりました。又創造の御力に富ませられて、御在學中「新イソップ物語」の御創作がございました。これは陛下が「イソップ物語」を御愛讀になつて、それから御

挿繪 沼津桃郷御用邸。

イソップ物語 古代ギリシヤの人アイソップ（イソップ）の作つたといふ寓話集。

構想を得させられたものでありまして、その中に「鮪はよと蛙」の一節がありますが、それは鮪はよがひでりて水がなくて非常に苦しんでゐるのを、蛙が見つけて氣の毒に思ひ、水のある所まで連れて行つて助けてやるといふ筋で、すでに帝王としての御仁愛の御さざしが、此の御時代に拜せられるのでございませう。

御日記は御幼少の頃からすでにお始めになつて、興味ある出来事は常にお書き留めになりましたが、大正三年頃よりは日々規則正しく御記入遊ばされ、今なほ御繼續遊ばされてゐらせらるゝやに漏れ承ります。御寫眞の御撮影も御好みになり、修學旅行・郊外見學などの折々にはお手づから御撮影になつて、丁寧に御整理遊ば

一〇
は「鮪」は「はえ」の關東地方の方言。

され、説明書をも加へさせられて御保存になるのが例でありまして、これは一面御嗜好に依る御慰みではあります。又他面御日記の補遺としてつけ加へさせられたものでございませう。

運動は御幼少時代から各種の方面に御興味をお持ちになつていらせられました。殊に人取遊戯・手巾拔・三色旗・軍艦遊角力等をおこのみになりました。稍御成長の後は木劍體操・乗馬・擊劍などを遊ばされ、御學友と共に技を練らせられました。又可憐な御伽遊戯なども御好みになつて、猿蟹合戦・桃太郎・浦島太郎、それからイソップ物語中の表情遊戯なども屢お繰返しになりました。室内の遊戯としましては言ひ廻し遊戯・行軍將棋・軍隊合

せ。雙六・投球盤などもお好みになりました。かくて大正三年四月二日、陛下には學習院初等科の御課程を御卒業遊ばされたので、さらに進んで御勉學あらせられるため、高輪御所内に東宮御學問所が設置されました。



そして御父天皇には、御學問所總裁に東郷元帥を御任命になりました。かやうにして、陛下は學習院時代には乃木大將に、御學問所時代には東郷元帥に御傳育をお受け遊ばしたのでございます。明治時

高輪御所 芝區高輪にある。

挿繪 明治四十四年渡歐船上の東郷・乃木兩將軍。東郷元帥 名は平八郎。海軍大將侯爵。昭和九年薨、年八十八。

代の日本が、國を賭して戦つた二大戦役に、大軍統率の衝に當り、國家興廢の一大事を双肩に擔つて、全日本國民の信頼を一身に集めたこの二大將が、身命を捧げて夢寐の間も兢兢として皇儲の御教育に盡くされた苦心には、私は國民の一員として最も深い感謝を捧げるものであります。御學問所の終り頃には、各地方を御旅行御見學遊ばされまして、親しく民情を御視察になり、又伊勢神宮を始として山陵・社寺等に御參拜遊ばされ、或は史蹟の御踏査、名所の御探勝、或は動物植物・礦物の御採集など、各方面にわたつての御修養に努めさせられたのでございます。博物學には殊に御趣味をお持ちになりました。御採集の標本類を以て標本館をお設けになり、御躬ら一切の御整理

二大戦役 日清・日露の兩役。

鏡一クワウ

を遊ばされ、且つ御幼少の頃から御使用遊ばされた玩具類等も、一切鄭重に取り纏めて此の標本館に陳列御保存になりました。曾て御奉公申上げた保母などが、御機嫌奉伺のため参殿いたしますと、陛下はいつも保母等を此所にお連れになつて、色々の玩具の並んだ前でくさくさの昔語りを遊ばされたさうでございます。

この外、御庭には花園もあり、小鳥飼育場もあり、且つ又小水族館もあつて、水中小動物なども御飼ひになりました。殊に農園を御設けになりました。御手づからいろ／＼な御野菜などをつくらせられて、その初生を御兩親陛下に御献上になるのを此の上ない御喜びと遊ばされました。又陛下には同所に御在學中、御自分の御自由な御構想で

奉一ホウ

構一コウ

屢御演説を御試みになりました。その御演説は、題材を歴史中の古今東西の偉人に求めさせられ、その言行に就いて遊ばされた御評論が多かつたのでございます。その立派な御態度、堂々たる御論旨は常に御進講者の敬服措かざる所でありました事は、屢私の漏れ承つた所でございます。

この御時代に、日本歴史の御進講者が、日本歴史を通じて最も御印象の深い事柄は何てございませうか。と御質問を申上げた事がありました。すると即時に、蒙古襲來の時に龜山上皇が身を以て國難に代らんことを伊勢神宮に御祈願になつた事でございます。と答へさせられたさうでございます。又杉浦重剛氏がある日、殿下の御愛誦の章句は何てございませうか。とおたづね申上げたところ、陛下は即座に、禮記の

伴一キ

杉浦重剛 滋賀縣の人。教育者。東宮御學問所御用掛。大正十三年歿。年七十一。

「日月無私照^シてあります。」と仰せられたさうでございませう。又同じく御學問所時代の御話ですが、歴史の時間に御進講者が、仁徳天皇の御宇、民の疲弊がその極に達し、天皇は三年に亙つて租税を御免じになるに至つた原因は何にあるのでございませうか。と御質問申上げました所、陛下には御一考の後、それは三韓征伐に原因を發してゐるのでありませう。と御答へになりましたさうであります、御學友は孰れも級中の優秀者でありましたが、一人もかゝる透徹した答辯をなし得なかつたさうでございませう。斯くして陛下には御研學の功を積ませられました、めでたく御學問所の七箇年を御經過になりました。

（聖徳を仰ぎて）

禮記「主として「禮」に關することを記された支那上代の書。

二 五十鈴の流

河野省三

昔、西行法師は伊勢神宮に詣で、坐ろに深い敬虔の念に打たれて、

何事のおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるゝ

と詠じた。神路山の翠濃やかに五十鈴川の流清らかな神境に歩を運び、清々しく神々しい御神殿を千木高く彼方に仰いで、徐ろに額づき奉る時、誰しも、尊さと畏さと懐かしさとの氣持が胸に溢れて來るのである。そこは我が皇祖天照大御神を齋き奉る所、遠い昔から皇室と國民と一體になつて崇め奉る所、天壤と共に窮りない我が寶祚と國運とが、御裳

河野省三 明治十五年、埼玉縣に生る。文學博士。國學者。國學院大學學長。西行法師 俗名佐藤義清。鎌倉時代の歌僧。建久元年（一八五〇）歿。年七十三。

神路山 三重縣（伊勢國）度會郡。宇治内宮を繞る山。五十鈴川 神路山より發して神域内を通り、二見に至つて海にそゞぐ。

濯の流遠く、我等日本民族の心の底を流れ行く信念の舍る所である。文久元年、橘曙覽はここに參拜して、
 おはしますかたじけなさを何事も
 知りてはいと涙こぼるゝ
 といふ一首に、その満腔の感激を表はしてゐる。げに神宮の歴史を知ること、即ち我が皇室の歴史を知るのであり、我が皇室の歴史を知ること、即ち我が國史の精髓を明かにする所以である。

嘉陽門院越前の歌に、

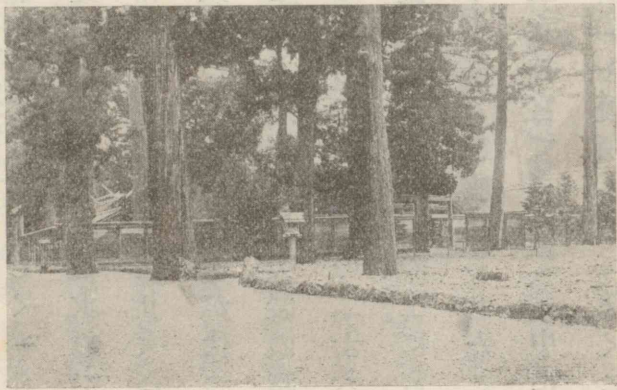
五十鈴川そのみなかみをたづぬれば

神路の山にかゝるしら雲

とある様に、神宮の御鎮坐を究め、その由來を調べてみると、

誠に悠久の感慨に入るのである。

皇祖天照大御神が皇孫瓊々杵尊に皇位の御璽として三種の神器を親授せられ、天壤無窮の神勅を賜うた時、特にその寶鏡に就いて優渥な御言葉を添へられた。爾來歴代の天皇はその御遺訓に基づいて皇祖の大御心を體し、親しく同殿共床の御儀を以て神器を奉齋せられたのであるが、崇神天皇の御代に、神威の發揚と皇威の發展とに伴ひ、神璽は御傍に留め、寶鏡と靈劍とは、政務の繁劇な宮中から笠縫邑の靈

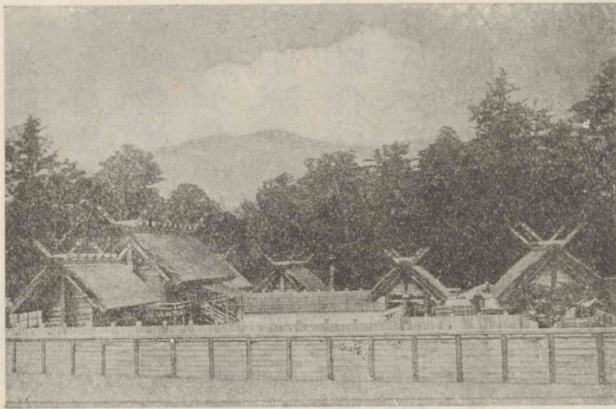


挿繪 外宮。

文久元年 孝明天皇の御代
 (二五二一)。
 橘曙覽 越前福井の人。江戸末期の歌人。明治元年(二五二八)歿、年五十七。

嘉陽門院越前 歌人。後鳥羽天皇の朝の人。

域に遷して嚴かな神殿を創建し奉つた。



模造して留め奉つた神鏡も、内侍所即ち賢所として、篤くこ

皇祖の神靈を奉齋した神宮には皇女豊鍬入姫命が恭しく奉仕せられ、更に適當な靈地を求めて丹波・大和・吉備の諸國を巡り、次いで垂仁天皇の皇女倭姫命が代つて齋宮となり、伊賀・近江・美濃の諸國を経て伊勢に出て、その二十六年九月、畏くも五十鈴川の上に宮柱太く千木高く鎮座せられた。これ即ち皇大神宮であつて、宮中に

吉備・備前・備中・備後・美作地方の古稱。
挿繪 内宮。

二十六年九月 紀元六百五十七年。

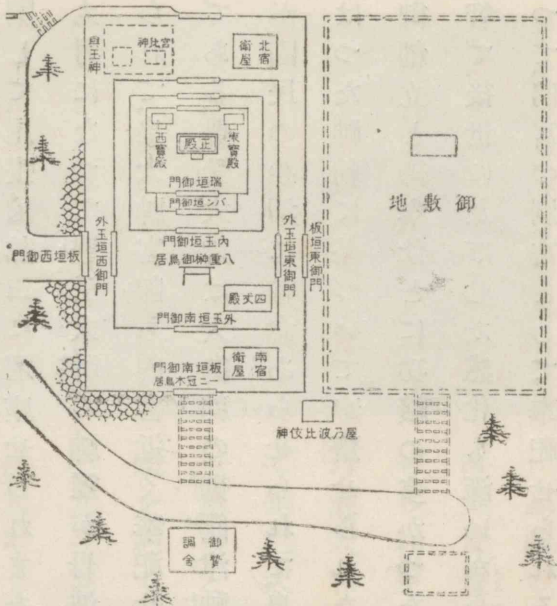
れを崇め奉つてゐる。

その後、靈劍は景行天皇の御代に日本武尊の東夷征伐に際して、尾張國熱田に遷座せられ、また雄略天皇の二十二年九月になつて、豊受大神の神靈が丹波國から山田原へ迎へられて、皇大神宮即ち内宮近く奉祀せられた。これ即ち外宮である。豊受大神は大御神の御饌津神であつて、蓋し大御神が國民の生活に軫念あらせられて、皇孫に齋庭の稻穂を賜はつた神勅に基づいて奉齋せられたのである。皇大神宮の御創立と御奉仕とに功績の多かつた倭姫命は、天資聰明叡智で、後世に及ぼした感化も深いから、大正十二年の冬に至つて、内宮の別宮として奉祀せられる事となつた。

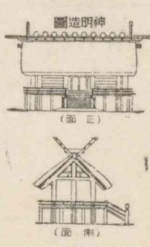
神宮は内宮・外宮、何れもいはゆる神明造の正殿の左右に

東夷征伐 紀元七百七十年
二十二年九月 紀元千百三十八年。

相對して東西寶殿が立ち、瑞垣・蕃垣・内玉垣・外玉垣板垣を以



て圍まれ、一般には板垣南御門を入つて、外玉垣南御門の前で拜し奉るのである。天武天皇の頃から、二十年毎に木の香新しく造營し奉ることとなり、後村上天皇朝以降、二十一年目毎になつた。御造營は力めて古來の建築様式を守り、主として檜材を用ゐて、御屋根は茅葺とし、彫刻色彩を以て裝飾することなく、



挿繪 皇大神宮宮殿圖。

専ら莊重と清淨とを旨としてゐる。明治天皇が「神社」といふ御題で、いにしへの姿のまゝにあらためぬ

神のやしろぞたふとかりける

とお詠み遊ばしたのは、蓋しこのことであらう。式年御造營に際しては、種々のゆかしい祭祀の後、莊嚴盛大な正遷宮が行はれる。昭和四年十月の第五十八回の遷宮祭には、全國各種團體の代表者もその盛儀に參列して、皇運の無窮と國運の隆昌とをことほいだのである。毎年十月十七日に行はれる國家の大祭日の一たる神嘗祭は、その秋の新穀を先づ皇祖の大御神に奉る神宮の御例祭である。齋宮として奉仕した齋内親王は、後醍醐天皇の朝

いにしへの、の御製 明治四十五年の御作。



に至つて断絶したが、明治の御代以來は特に神宮司廳を設け、親任の祭主を置かれ、なほ大宮司、少宮司、禰宜以下多くの神官が奉仕することとなつた。年中の恆例、臨時の諸祭典は、即ち上皇室より下國民に至るまで、心を一にして皇祖に奉仕し、以て寶祚の無窮、國運の發展を祈る所の道德と生活との反映であつて、明治天皇の御製に、

挿繪 奉選勅使御祭文を捧ぐ。

神風の、の御製 明治三十七年の御作。

神風の伊勢の宮居のことをまづ
ことしももの始にぞきく

とあそばしてをるのは、全くこの深い大御心に出てをるのである。國民が伊勢參宮を以て一生一度の懐かしい榮ある義務と心掛けてをるのも、全くその國民性に出で、その信念に因るものであつて、上下相俟つて、我が國體の精華を成してゐるのである。されば億兆の國民が皇室を中心として我が皇國に奉仕してゐると同様に、全國十餘萬の神社も、皆この神宮を中心として、我が神國を守護しつゝあるのである。我等日本人は五十鈴川の清流に口と手とを清め、心を洗つて、廣前に頭を垂れた時、おのづから昭憲皇太后の御歌の心がしのばれるのである。

榮はえ

神風の伊勢の内外の宮ばしら

ゆるぎなき世をなほ祈るかな

三 國 境

北 原 白 秋

私は國境安別の砂濱に立つた。上つて見ると、沖から見た通りの荒涼たる寒村であつた。

とうとう國境まで來たのかと思ふと、ひえんと私は雨の濕りに顫へたが、また子供のやうに、そこらを駈け廻りたくもなつた。

「や、車前草だ。素敵々々。」

それは、樺太車前草とでもいふのだらう、すばらしく大きな葉だ。それが、踏めば實に柔かな緑を輝かしてゐる。砂濱から一段上ると、その車前草に縁どられた徑が續く。大勢通つたので、ひどい泥濘になつてゐるので、私は草の上を歩く。

北原白秋 名は隆吉。詩人。明治十八年福岡縣に生る。

荒涼—クワウリヤウ

車前草—おほばこ



「や、驚いた、馬鈴薯の花だな。」
内地では五六月ごろの薄紫の馬鈴薯の花だ。蕊の黄色い新鮮な花。

「や、菜の花だな。これは驚いた。」
とある漁師の家の窓から、女の子がたつた一人、面を出してゐた。その前の畑には、いかにも、雨に濡れた黄色の菜の花が咲き群れてゐた。それに豌豆の花、背の低い唐黍、葱坊主。その他鮮かな野菜の花。この暮色と初夏との色。

私は又びしやくと緑の上を歩いてゆく。雨が次第にあらりかけて來たが、まだ横なぐりに吹きつけることがある。間を隔ててぼつりくと駐在所があり、郵便局があつた。それはバラック式の果敢ないものであつた。以前に國境守

漁師—れぶし

豌豆—まんどら

バラック Barrack 假小屋。

護の駐屯兵が住むために急造したといふ小舎のまゝであるらしかった。東洋風の簡素なものだ。

だが、何といふ巨大な虎杖であつたらう。それらの小舎のうしろ、丘の崖から下の裾まで叢生した虎杖の、早くも蟲がついて黄ばみかけた葉の間は、今まさに淡黄緑の花盛りであつた。それに丈の高い女郎花に似た黄色い草花の目ざましさ！。私はまた立ちとゞまつて、これ等の始めて見る樺太の景趣に目を圓くした。

それはく、燃え立つやうな細い赤い實の、つやくと群つた名も知らぬ木の藪があつた。

「あれは何の實。」
「ななかまど」

と、一人の男の子が私の間に答へた。

風と雨とがまた激しく音を立て始めた。

「おゝい、おゝい。」

前から後から、わが団員の數々が、その風と雨と、しぶきで飛んでゆく霧の中から呼び應へる。

かうして、私たちは國境の天測點へと、草ばかりの一つの丘の頂邊を目ざして、泥濘のひどい小徑をうねりくして登りかゝつたのである。

そこらは虎杖の花盛りであつた。樺太虎杖の花は、内地で見るやうな、ほのくとした淡紅色を含めてゐないが、その緑がかつた薄黄は、却つて度々しくてあはれであつた。それが雨と霧とに、濡れしづくになつてゐるのである。

天測點 天測境界點。天文測景に依つて境界の基礎を定めた地點。

虎杖—いたどり

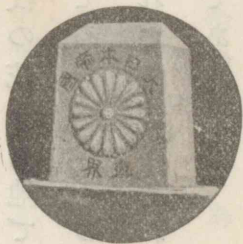


女郎花—をみなへし

ななかまど—七盛



太い丸太の無造作な二坪ばかりの周囲の柵があつた。その柵は朽ちかけて、既に外皮の處々はボロ／＼にくづれかけてゐた。その中に日本と露西亞との境界標石が嚴然と立つてゐるのだ。正方形の臺座に据ゑられた鼠色のその標石は、高さは二尺にも満たないであらう。北面に鷺、南面に菊の御紋章が浮彫りにしてあつた。私は露西亞領の虎杖の草叢にもはひつて見た。北を眺めると、その海岸線は南と同じやうな、さして高からぬ丘陵が続いて、立枯れのとゞ松の疎林が、しきりなく流れる雨雲の下にほう／＼と打煙つて見えた。寂とした國境であつた。(フレップ・トリップ)



挿繪 日・露境界標石。



四 蟲の音

沼波 瓊音

私は一年の中で秋が一番好きである。なぜ生きてゐるか、どういふ目的で生きて居るか。と問はれれば、秋を味はふのが生存の一つの目的である。と答へるぐらゐに、私は秋を好ましく思ふ。私が秋に對して感ずる心持はどうかといふに、荒立つた後に來る澄んだ心持である。悲しいとか、腹立たしいとか、感情が激しく動いた後に、非常に靜かな落着いた心持になる、その荒立つた感情の後に來る心持、それが秋の心持である。兵士が劇しい荒びた戦争に飽きて發心した心持にても喩へようか。とにかく細かく優しく、そして澄んだ感じである。

沼波瓊音 名は武夫。第一高等學校教授。昭和二年歿、年五十一。

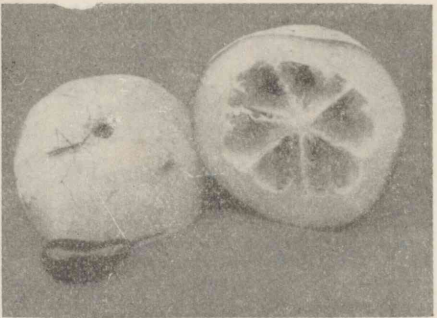
秋の味

荒び―すさび
發心―ホッシン

かういふ心持は秋の風物の何物にでも現れてゐる。物の形でいへば、日光・月光・雲・草花など、それらのものにもこの心持は著しく現れてゐる。句でいふと木の花、觸覺ツカカサに感ずるも

のでは冷たい風、聽覺ミコトに來るものでは蟲の音、そのすべてに、前に述べた秋の感じは現れてゐるが、殊に蟲の音に最も著しく現れてゐる。

耳に觸れるものでは、春はいろいろな小鳥が啼くし、夏の盛りには蟬が鳴くけれども、蟬の聲は却つてうるさいものである。秋の蟲の音を聞く心持は、春の朧夜に鳴く蛙の聲を聞く心持にも較べられるが、蛙の聲は卑俗で單調で、蟲



挿繪 蟲

の音ほど複雑な優美な、そして細かな感じを起させない。その點に於て蟲の音は最も優等で、前に述べた秋の感じなり味ひなりを一番深く現してゐる。小鳥の聲だとか蟬の聲だとかは、外的とでもいふのか、外に現れるやうな趣を持つてゐるが、蟲の音は内的である。蟲の音を聞くと、心の眼が内に向つて開くやうな氣持がする。

蟲の音は俳句では秋の季題になつてゐるが、實際は土用の中から鳴き初める。それも好い。秋に入つて月夜に鳴くのも好い。闇夜に鳴くのも好く、また聞きながら眠に入るのも好く、夜中にふと目覺めて聞くのも趣がある。朝早く聞く、晴れた日の晝間聞く、雨の降る日に聞く、それ／＼異つた情趣があつて、いづれも好い。殊に夜汽車にでも乗つて行くと、或

土用 夏の土用をいつた。
小暑の後十三日（七月二十日頃）より立秋に至る十八日間の稱。

淋しい驛に着いて、ふと蟲の音を聞くことがあるが、旅の哀れも一入覺えられて、深い味ひがする。また夜の銀座の明るい賑かな通りを歩いてゐて、一寸細い暗い路地に入ると、足許で蟲の音がしてゐる。趣が更に深い。それから秋每晚蟲の音を聞いて、それが冬の初になつて、今まで蟲の音に慣れてゐた耳に、全くなんの音も入らないのに氣づく、堪らなく寂寥を覺えるものである。

（しら椿一卷）

一入一ひとしほ

銀座 東京市京橋區にある大通り。

五 果物の味

正岡子規

果物ほど味ひの高く清きものはあらじ。小兒はこれを好み、仙人もこれを食べふとかや。青梅は酸くして口を絞れども、鹽少しばかりつけんには、味ひ言ひ難し。杏は乾びて賤しく、李は水多くしてあさはかなり。苺は西洋苺を良しとす。されど行脚の足くたびれて草鞋の緒ゆるみたる頃、巖の角に腰うち据ゑて、汗を拭ふ手の下に端なく見附けて取り食ひたる、味ひは問はず、時に取りていとうれし。神戸に

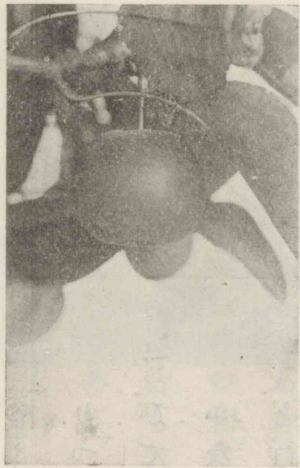


正岡子規 名は常規。俳人、歌人。愛媛縣（伊豫國）松山の人。明治三十五年歿年三十六。

挿繪 子規筆 青梅の圖。

据ゑ

病みし時、物一つ咽喉を通らず、乳さへ飲みえぬに、わが爲にとて、碧虚二子の朝な夕な、諏訪山の露を分けて、一籠の赤き玉をもたらしくれたる、いかばかりうれしかりしぞ。



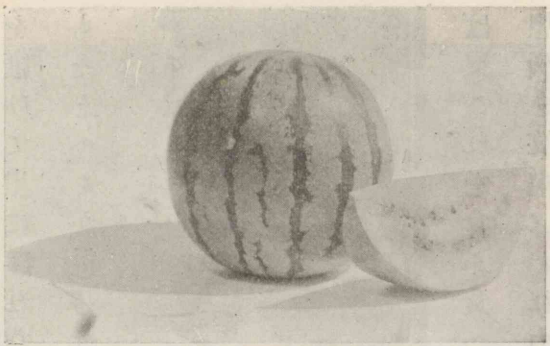
枇杷はうまけれど、種子大きく肉少なきは飽かぬ心地す。桑の實はなべての人に知られねども、果物の中、これを外にして甘き物はなし。晝餉さへした。

めずに貪りたる木曾の旅の思ひ出でられて懐かし、夏蜜柑ザボンの類、俗を離れて涼し。さして良しとはあらねど、少し病みて飯さへたべえぬ時など、またなき物とぞ覺ゆる。梨は涼しく潔し。南窓に風を入れて、柱に倚り、襟を披き、片

碧・虚二子 河東碧梧桐と高濱虚子。諏訪山 神戸市の北部。

挿繪 梨。

ザボン Satsumi 柑橘類中最大の球形果を結ぶ。



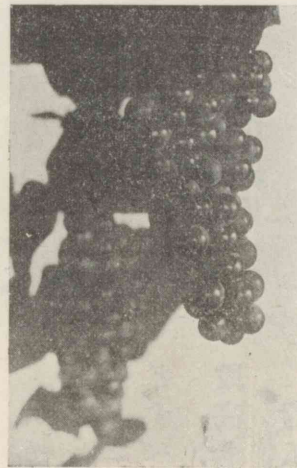
手にて團扇を持ちながら、一片を口にしたる、氷にも優りてすがら、しうこそ。林檎は北海の産を最上とす。齒にさはれば形消えて、すずやかなる風味ばかり口の中に残りたる、仙人の薬にも似たらんか。桃には種類多し。良きもあり、悪しきもあり。王母後園の風味は知らねど、すべて桃は世に諂はぬところ一段高き趣あり。

甜瓜・西瓜ひなびたれど誠あり、すて難し。葡萄は甘からず、澁からず、人に媚びず、さりとして世に負かず、君子の風あり。栗は賤し、甘藷と比べられたるも口惜し。柿は野氣多く、冷

挿繪 西瓜。

王母 西王母。漢の武帝に三千年に一度實のる桃をすゝめたといふ仙女。

かなる腸を持ちながら、味ひはいと濃かなり。多血性の人世を厭ひて里に隠れながらなほ物に觸れて熱血を逆らすにもたとへんか、柚子は氣高けれど食ふべからず。柘榴無花果



のわれから裂けたる、食ひ劣りぞする。

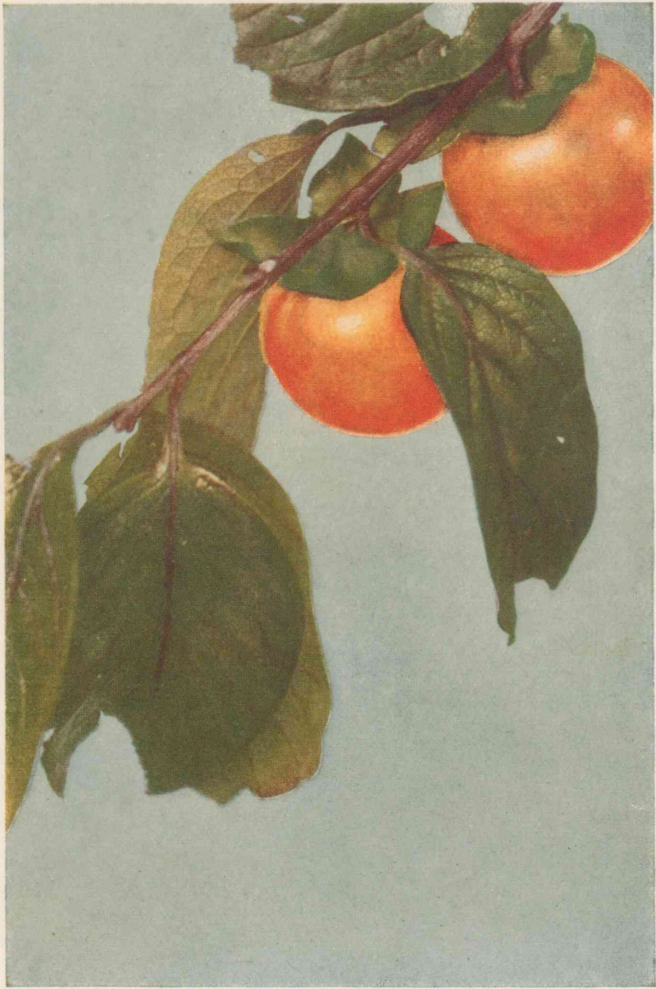
われこの夏頃よりわけて果物を貪り、物書かんとすれば必ずこれを食ふ。書きさして倦め

ば又これを食ふ。食へば即ち心涼しく氣勇む。氣勇めば則ち想涌き、筆飛ぶ。われ力を果物に借ること多し。

日ごとく十顆の梨を食ひけり。朱硯に葡萄のからの散亂す

挿繪 葡萄。

涼しすぎし



柿

柿くうて洪水の詩を草しけり 一(子規隨筆續篇)一

柿を送られし禮狀

正岡子規

只今は失敬致候。お歸りの後、家人御賜物を運び來りて見せ候處、最早我慢の緒が切れ、とう／＼一つねだりとり申候。これは當地にて蜂屋と申候やらん、我が郷里にては祇園坊（まゐりば）と申候。凡そ天下に柿多しといへども、この柿に増すものは無之候處、根岸に無之候爲、終に口に入らず、郷を出でて二十年、始めて好味に接し申候。定めて御持參困難なりしことと存候。右御禮まで。勿々不悉。

十一月五日夜

規

ふもとさま

鄙にては祇園坊といふ都にて蜂屋ともいふ柿の玉は、これ味ひを何にたとへん形さへ濃きくれなるの玉のごとき柿

根岸 第六課の註参照。

十一月五日 明治三十二年

ふもと 岡鹿、東京市の人
明治十年生。歌人。

六柿二つ

高濱 虚子

ランプの光は静かに更けて行つた。時々上野の森に反響して轟き過ぎる汽車の音があるばかりで、根岸の夜は沈んだやうに寂しかった。

日によつて不定であるけれども、此の頃は一體に彼の熱は夜に入つて下ることが多かつた。夜半頃から再び上るのではあるが、其の平熱になつた時の心持は、流石にすがかつた。病主人の頭はさう云ふ時に一層透明になるのであつた。彼は自分を神かと疑ふばかりの明快な判断を、數限りない句の上に下すことが出来た。句の巧拙は色の黒白の如く、明白に一見して立ちどころに判断することが出来た。

高濱虚子 名は清。明治七年、松山市に生る。小説家、俳人。
上野の森 東京市下谷區上野公園の森。
根岸 上野公園の北麓の地。正岡子規の住宅はここにあつた。

自分をあやしむ位に、それが容易に且つ迅速であつた。

彼の寂しい家庭には、六十を過ぎた老母と、今年二十七になつてまだ嫁がない妹とがあるばかりであつた。老いたる



母も、嫁期を失した妹も、唯主人の病を看とるために生きてゐた。二人は次の室の暗いランプの下で病室の物音に耳を欵てながら、各黙つて針を運んでゐた。

老い

挿繪 子規肖像。

やがて彼の妹は膝の絲屑を拂つて立上つた。それは病主人の枕許に、盆に載せた柿を運ぶためであつた。
「もうこれきりかい。」

と、彼はながし目に其の盆の柿を見ながら聞いた。

「昨日あんなにお食べたから、もうこれぎりよ。」

と彼の妹は答へた。盆の上にはたゞ二つしか載つてゐなかつた。

彼は總てのものに健啖である中に、殊に果物を好んで食うた。中にも柿は飽くことを知らなかつた。

彼は忽ち食指が動いたのだが、唯二つの柿を今食つてしまふことは心細かつた。それは是非とも今日の大事業―投書函の一掃―が完了した時の慰藉の料に取つて置かねばならなかつた。彼は心のうちで呟いた。選がすんでしまつたら、此の柿を御褒美に遣るよ。今一息だ。たゆまずに片附けてしまへ。」と。斯くて漸く底の見えて來た句稿の選に、更に一心

不亂に取掛つた。

燈火は主人の心を知るかのやうに、瞬きもせず牙え渡つた。傍の火鉢に炭のつがれたことも、時計が十二時を打つたことも、老いたる母の寢床にはひつたことも、彼は知らぬてはなかつたが、其等は餘り深く注意を惹かなかつた。彼の妹が床にはひつたのは、それから一時間も後であつたが、それは其の物音が彼の仕事の妨げにならぬやうに、いつふせつたとも分らぬ位ひそやかであつた。静かな、沈んだ夜の呼吸が聞えた。彼の目は燈火に光り輝いて此の夜の色の中にひとり帝王のやうな威を示してゐた。

最後に手に當つた草稿を見終つて後、彼は念のため投書

位―くらゐ。

威―キ。

函を掻き探して見たが、もう其處には一枚も留めなかつた。彼は朱筆を投げ棄てたまゝ、兩手で頭を抱へて暫く身動きもしなかつた。

久しく心に懸つてゐた仕事を片付けてしまつた、慄へるやうな満足の情と、病軀に不相應な努力のあとに來る疲勞の恐とで、彼の心は暫く掻き亂されてゐた。が、やがて其の頭を抱へてゐた手をほどいて、蒲團の外に現した彼の顔は、いよいよ興奮して、蒼白い皮膚の中にも、頬のあたりの赤みは色を増してゐた。

もう時計は二時を過ぎてゐたが、彼は少しも睡いとは思はなかつた。燈火を中心とした此の病床六尺の天地は、今は何物にも煩はされることのない、極めて自由な、希望に充ち

た世界のやうに思はれた。今や彼の體温は再び上つて、其の爲にいつもの酒に酔つたやうな興奮した心持になつてゐるのであるといふ事には、氣が附かうともしなかつた。

彼は煩はしげに盆の上の柿を見やつた。柿の赤い色は媚びるやうに輝いてゐた。彼の食欲は猛然として振ひ起つた。彼は餓ゑた虎が残忍な眼を光らせて兎を擱むやうに、忽ち其の柿の一つを取り上げて、皮をむき始めた。

此の柿は京都伏見の桃山に庵を結んでゐる愚庵といふ禪僧から贈つて來た、釣鐘といふ珍しい名の柿であつた。さういへば形がどこか釣鐘に似てゐた。此の禪僧といふのは、維新の戦亂に生死不明になつてしまつた其の母と妹との行方を、何十年かの間探したが、遂に見當らなかつたことが

餓ゑ。

愚庵 俗名天田五郎。明治三十七年歿。年五十一。

動機となつて、中年から天龍寺の峨山和尚の錫杖の下に僧となつた人であつた。主人は既に數年前から交遊があつたのであるが、此の禪僧も主人と同じく肺を病んでゐる上に、萬葉調の歌を能くし又書に巧みであつた。俳句は作らなかつたが其等の關係から互に推重して、何かにつけて贈答を怠らなかつたのであつた。今度の柿は桃山の草庵に禪僧を訪ねた人が、其の庭前の柿を託されて、遙々と携へて歸つて、病床に齎したものであつた。

それは昨日の事であつた。其の人がまだ枕頭に在る間に、彼はもう辛抱が出来なくなつて、其の柿を三つ續けざまに食つた。其の人が歸つた後も、夜寝る迄に十ばかり食つた。今夜枕頭に運ばれたものは、其の残りの唯二つであつた。彼は

天龍寺 京都市右京區嵯峨
天龍寺馬場町にある。臨
濟宗の巨刹。京都五山の
一。
峨山和尚 俗名橋本昌禪。
天龍寺派管長。明治三十
三年寂、年四十九。

其の一つを取つて、其の皮をむくより早く、忽ちそれに武者振りついたのであつたが、もう大方食ひ盡くして、帯の所に達した時、少し顔を擧めた。それは稍澁かつたのであつた。さう云へば昨日食つたのも、大方は少しづつ澁かつたのであつたけれども、彼はそれに頓着せず、其の帯の所の際まで、少しも残さずに食つてしまつた。

三千の俳句を閲し柿二つ

當用日記に彼は毎日の出來事を句にして、十句づつ書くことを日課にしてゐた。明日になつて今日の部を認める時に、忘れぬやうに此の句を加へねばならぬと思つた。疲勞が一時に出て來るやうに思はれて、頭がぐらくした。彼は始めて熱の高いことを覺えたのであつた。

―(柿二つ)―

課一〇〇

七 造化のたくみ

土井 晚 翠

鳴呼うるはしき天地の、
たくみをいかにたへまし、
月日めぐりて年逝きて、
かはるいくそのけしきぞや、
春の歩みの着くところ、
地に花かをり草いろひ、
はるの呼吸の行くところ、
空に蝶舞ひ鳥歌ふ。

土井晚翠 名は林吉。明治四年仙臺市に生る。英文學者。第二高等學校名譽教授。

清きは夏の夕河原、
涼しきながめ見よやとて、
空に月照り風そよぎ、
地に露結び水流る。

しぐれも雲も時めきて、
秋のゆふべの色よはた、
谿は紅葉のあやにしき、
嶺は友よぶ鹿のこゑ。
冬はあしたの朱のいろ、
色なき空に色ありて、

雪のこずゑに梅かをり、
うめのこずゑに雪かゝる。

あゝいつくしき天地の、

たくみをいかにたゝへまし。

同じ一日の空合も、

遷るいくそのながめぞや。

—(晚翠詩集)—

八 海濱の草

柳田 國男

大阪から中國邊へかけての新田には、中世まで白帆の走つてゐたところが多い。以前の大小の島々は、今は塘によつてつながれて陸地となり、その陰を汽車が往來してゐる。或は又吹きまくる風に打ちよせられた砂や小石が、次第に積上げられて、一帯の砂濱を發達させた處もある。所謂長汀曲浦の風光の如きも、追々に改らざるを得なくなつた。海濱の草木はこれがために非常な影響を受けた。今日空漠たる荒濱に生残つてゐる草花などを見ると、僅かに生を全うして還つて來た勇士を見るやうな思がする。日向國の南の海岸を行くと、岩の陰に隠れて、色々の南國らしい植物

柳田國男 文學者。明治八年姫路市に生る。東京帝國大學政治科出身。

塘—つつみ

が生存してゐるが、その間を縫うて繁茂してゐる葵葉の牽牛花などは、恐らくは、我々がまだこの花を栽ゑて賞美しなかつた時代から、既にこの附近の天然を占據してゐたのであらう、例へば熊襲隼人の如くに。

濱に這ふ植物としては、葉の表が平らで、滑りがよく、枝に力があつて、よく花を支へるものでなければならぬ。例へば蔓荊の如きがそれである。此の花は花の香が強烈に過ぎ、木の形も荒くれてゐるために、僅かに浦人がその實を採つて枕に入れる位のもので、通例は顧みる者もないが、日本の中部以南の海岸の風景には、松を除けば、この物が最も多く見られるのである、自分が此の花を始めて知つたのは、三十年前、三州の伊良湖岬であつた。廣々と東南の大洋に面し

伊良湖岬 愛知縣、渥美半島の南端。

た砂濱に立つて、一人薄暮の幽寂に瞑想を恣にしてゐると、何處ともなく微風に送られて、僅かに香氣を送つて來るものがある。それが蔓荊であつた。土地ではこれを「はまばふ」と呼んでゐた。濱に匍ひ伸びて、時としては、一丈にも餘り、小高い處から見下すと、繪を見るやうな優美な趣を見せてゐる。花の色は淡い紫で、青空に翳せば殆ど消えんばかりの風情がある。この優しい風情に心を惹かれて、私は今でも處々の海濱で立止まつては、じつとこの花に見入るのである。砂や小石の吹寄せられて擴がつて行く濱邊の浪打際の風光は、未來永劫、この植物によつて支配せられることであらう。

南部日本の「はまばふ」に對して、北の濱邊には「はまなす」の花がある。花の艶麗な點では遙かに蔓荊に優れてゐる。支那

永劫—エイゴフ。

では玫瑰は苑中の物であるらしいが、我が國では未だに野生の植物として繁茂してゐるだけのやうである。海岸を走る汽車の窓から見ると、この花は日本海の方面では鉢崎、鯨波のあたりから、次第に旅人の目を留めしめる。そして鼠ヶ關、三瀬の邊からはいよゝゝ多くなり、果もなく北へ北へと續いてゐる。太平洋岸でも、茨城縣を過ぎて福島縣の濱邊に達すると、急にこの花の群が多くなる。

全體に、この木の多くある處は、里や林を稍離れた、寂寞たる砂原である。風に吹撓められた高山の偃松帯の如く、人の足も立たないやうに密生してゐる。枝は無意味な茨であり、隨つて折角鮮明な紅の花をつけても、傍の綠と相映ずるといふやうな風情はないが、その代り、渺茫たる海の色や、照り

鉢崎 新潟縣中頸城郡。
鯨波 同縣刈羽郡。鉢崎と
共に直江津と柏崎の中間
鼠ヶ關・三瀬 山形縣西田川
郡。共に鶴岡市の南方。

紅くれない。

八重やへ

つける日の光が際限もなくその幽艶の美を助けてゐるやうである。八重の薄桃色の薔薇にばかり馴れた目には、この古雅な紅色の單瓣が何よりも懐かしく感ぜられる。夏の北海の靜かな眞晝、この木の傍に佇んで、沖にたなびく白い長い雲を見てゐる氣持は、日本民族の心の中にのみ残されてゐる情致であらう。

島こそ小さいが、日本の自然は、色彩が豊かで、到る處に多くの珍異を見ることが出来る。心なき人の手に荒されて、風情ある海濱も次第に趣を失うて行かうとしてはゐるが、まだその美しさを保存させる望は十分にある。力めて旅行を容易ならしめて、若い眞率な旅人をして、今少し楽しんで自然を視るやうにせしめたい。

〔雪國の春〕

九 物識り五郎助

藤澤 衛彦

丹波栗の頻りに笑み初めた時分、物識り五郎助は、まだ故郷の篠山に居りました。

丹波中で己程の物識りはよもあるまい、いろは四十八文字は勿論の事、年中の行事の理由から、方位家相の吉凶、何事も心得たものだが、一向に幸福の事が遣つて來ない。こればかりは、いかな物識り五郎助さんの己にもわけがわからないと、われと我が身を怨めしさうに呪ひながら、鎮守の森の方を眺めてをりました。その時丁度、五郎助の頭の上を飛んで行つた二三羽の鴉が、時の森の彼方へ歸ると、「あほう、あほう、あほう」と夕暮の空に叫び出しました。

藤澤衛彦 明治十八年埼玉縣に生る。民俗學者。明治大學教授。

篠山 京都府多紀郡篠山町。

「何だい、この物識りの五郎助さんが阿呆だと。やい、何處が阿呆なんだ。」

かう言つて、怒鳴つてをりました時、又一羽の時鳥が、姿も見せずに渡つて行きました。てつべんかけたか、……おとこひし。」と一聲、天の一方で、帛を裂くやうな聲で鳴きました。が、五郎助には「鐵瓶掛けたか、弟戀し。」と聞えました。

「ほい、すっかり忘れてゐた。火を起しつばなして、鐵瓶を掛けて置くのを忘れた。それに、弟も、もう山から歸つた時分だ。えらい注意深い鳥だぞ、では歸りませう。」と呟きながら、五郎助が、麓の家へ歸つて來ますと、家では弟の十郎助、夙くも夕食の支度を済まして、嬉しさうに物識りの兄貴を迎へました。

聲 こゑ

聞え

「兄さん、今日は大變に遅いお歸りですなえ。もう御飯も出來てをりますから、さあ、一緒に食べませう。」

「いゝや、己は、まだ、ちつとも欲しくない。お前一人で食べたがよからう。それに、兄さんは、今日ちつとばかりし氣にかゝる一事があるんでな。……森に行けば鳥があほう、あほう、と呼びくさる。時鳥までが、鐵瓶かけたかなんて、おせつかいを焼きくさる。全く邪魔になつて、よい考が纏らないんだ。」

「さう言へば兄さん、兄さんは、此頃諸事に忘れつぽく、又、大變に物臭くおなりのやうです。些細な火の起しつ放しなにかどうでもようございませがね。かうやつて一日中ぶらぶらなさらずに、あんなつまらない物議りの看板なんか取り外してしまつて、どうです、御一緒に京都に上り、立派な奉公

を爲遂げようではありませんか。」

かう弟に勧められて、五郎助が暫く考に沈んでをりました時、裏山の方で、「五郎助、奉公、皆奉公。」と梟の鳴くのが聞えました。それを、じいつと耳を澄まして聞いてをりました五郎助は、忽ち、

「うん、行つて見よう。きつと幸福の身分になれるだらう。」と、自信するらしく申しました。

それから間もなく、旅路を都に上つて來た五郎助兄弟は、都の入口の、とある森を過ぎました時、ふと又、梟の鳴く音を聞きました。梟は、相變らず、「ぼろすけほうほう、むだほうほう。」と鳴いたのですが、五郎助には、さうは聞えませんでした。「何だつ、五郎助奉公むだ奉公だつ。無駄になつてたまるか。」

い。おい弟よ、やつぱり、兄さんには奉公が相當しないらしい。」
 どれ、それでは、やつぱり、物議り博士の看板を掛けようといふので、鐵釘流の看板を出しましたところ、流石に都は金どころで、種々の頼まれ事に先づ先づ不自由もなく過ごすうち、或日の事、大切な寶物を盗まれたといふ、或るお公卿様から、盗まれた寶の有り場所、盗んだ者の誰であるかを知らしてくれろといふ申込みがございました。

五郎助が、早速出かけて行きますと、まづ御馳走を差上げたといふので、立派な室に通されましたが、聽て、一人の下男が、第一の御膳を捧げてやつてまゐりました。見るから旨さうな御馳走なので、

「ふん、これは、噂に聞いたやつだな。これが第一の奴だ、うま

いだらう。」

と、五郎助は思はず叫び出しました。これは、彼が、これこそ噂に聞いた一の膳、二の膳、三の膳の、第一のやつだな、さぞ旨しからうと、珍しがつたつもりだつたのですが、これを聞きました下男の方では、さうは受け取りませんでした。實は、この下男こそ、四人組の盜賊の一人で、御主人の寶物を隠しました發頭人でしたので、物議り先生の獨語を、これが第一の盜賊だ。流石に己の觀察はうまいものだらう。」と、先生が暗に呟いたものだらうと推測しましたので、全く以てびつくりしてしまひました。で、心配のあまり、仲間の者共に、この事を知らせまして、

「物議り先生は、確に皆知つてゐるらしい。俺達は、悪いはめに

落ちてしまつた。今、先生は俺が行くと、あれが第一の奴だと
言ひ當てたよ。」

と、びく／＼ものでをりました。で、これも盗賊仲間の二番目
三番目の下僕は、饗應のお座敷へ、決して行きたくはなかつ
たのでしたが、それでも、仕方なしに、二の膳三の膳を捧げて
出てまゐりました。ひよつとこれを見た五郎助先生、

「ふん、あいつが第二、あいつが第三の奴だ。」

と獨言を言ひますと、盗賊仲間は圖星を指されて傷持つ足
ぶるつと震へて、ひよろ／＼逃げ歸つてまゐりました。

すると、やがて四番目の男は、蔽ひに手拭を掛けたお皿を
持つてまゐりました。それが五郎助の前に置かれました時、
お公卿様は、物識り先生に、

まゐる

「先生の技術を示されて、この下にある物を當てて戴きた
い。」
と申し出ました。其の皿の中には梟が這入つてをりました
のですが、實は、何の術も無い五郎助は、はたと當惑してしま
ひまして、

「あゝ、このあはれなる、五郎助よ。」

と言つて、嘆息した言葉が、お公卿様には、五郎助が「ぼろすけ」
と聞えました。梟の事を、昔から、ぼろすけと言つてをります
が、五郎助自身は、たゞ、自分の名を呼んで、眞實、哀れなものよ
と、嘆聲を洩したつもりなのでございしました。然し、これを聞
きましたお公卿様の方では、さうとは知りませんので、
「あゝ、よく知つてをられる。では寶物の在所も、ちやんと知

つていらつしやるに違ひない。」

と言つて、大層喜ばれました。これを又、すつかり聞き届けてをりました四人組の下僕の方では、驚くまい事か、すべてが、ちやんと分つてしまふので、大變な心配でございました。機を見て、五郎助に、ちよいとお顔が拜借したいと申し込みましたので、何であらうと、顔を貸してやりますと、

「實は先生、まことに恐れ入りましたが、お睨み通り、盜賊は吾々四人組でございますが、もう再び悪事は致しません。どうか、此の度のところは、お宥し下されまして、萬事祕密に願ひたうございます。その御禮には、寶物を差出します事は、勿論、別に、私達よりも相當の御禮を差上げますから。」

と、くれぐれもの頼み、察するに、四人とも、心から後悔してゐるらしいので、聞く事毎に案外の思ひを重ねました五郎助も、感違ひされたのを幸ひ、まこと知つた風を装ひまして、
「なに、寶物さへ出れば、己の面目も立つといふもの、それでは、晩までに、御主人の寶物は、納屋の隅に置いておくやうに。」と、一應戒めまして、四人の罪は宥し、更めて、お公卿様に打合せて置いた場所を指示して、隠された寶物の所在地であると告げました。果してその通りでありましたので、お公卿様からは、澤山の報酬金を貰ふ、四人組からお禮を貰つて、急に五郎助は福々になりました。
そのことあつてからといふものは、物識り五郎助の評判は非常に高くなり、故郷の丹波國は勿論のこと、近郷近在に

亘つて、この物議り五郎助の名を知らない者は一人もないといふほどの、大層有名な、ゑらい人になつたといふこと、でございます。――(滑稽童話集)――

△傳説は國民の趣味の自然に滴つて凝固したものである。

△傳説は社會が黙つて書いた歴史である。

△傳説は居間に於ける内證話である。其のひそ／＼と語られる聲は、低いけれども心底の欺かぬ聲であり、而して秘親展の手紙を見るやうな床しい味をもつて居る。

(五十嵐 力)

五十嵐 力 明治七年山形縣に生る。文學博士。早稲田大學教授。

一〇 吾輩は猫である

夏目漱石

主人の庭は、竹垣を以て四角に仕切られて居る。縁側と平行して居る一邊は八九間もあらう。左方は雙方共四間に過ぎぬ。今、吾輩のいはゆる垣巡りなる運動は、この垣の上を落ちないやうに一周するのである。これはやはり損ふこともまゝあるが、首尾よく行くとお慰みになる。殊に處々に、根を焼いた丸太が立つて居るから、一寸休息するにも便宜である。今日は出來がよかつたので、朝から晝迄に、三遍やつて見たが、やるたびにうまくなる。うまくなるたびに面白くなる。とう／＼四遍くり返した。ところが四遍目に、半分巡りかけ

夏目漱石 名は金之助。東京の人。文學者、小説家。大正五年歿。年五十。

たら、隣の屋根から鳥が三羽飛んで来て、一間ほど向うに列を正してとまつた。これは推参な奴だ。人の運動の妨げをする。殊に何處の鳥だか籍もない分際で、人の扉へとまるといふ法があるものかと思つたから、通るんだ。おい退き給へ。」と



聲をかけた。眞先の鳥はこの方を見て、にや／＼笑つて居る。次の奴は主人の庭を眺めて居る。三番目の奴は嘴を垣根の竹で拭いて居る。何か食

べて来たに違ひない。

吾輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つて居た。通稱を勘左衛門といふさうだが、なる程

挿繪 漱石肖像。

答一タウ

勘左衛門だ。吾輩がいくら待つても、挨拶もしなければ、飛びもしない。吾輩は仕方がないから、そろ／＼歩き出した。すると眞先の勘左衛門がちよいと羽を廣げた。やつと吾輩の威光に恐れて逃げるのかと思つたら、右向きから左向きに姿勢をかへただけである。

地面の上なら、その分に捨て置くのでないが、如何せん、只さへ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にして居る餘裕がない。餘裕がないといつてまた立ち留つて、三羽が立ち退くのを待つのもいやだ。第一、さう待つて居ては足が續かない。先方は羽のある身分であるから、こんな處へは、とまりつけて居る。従つて氣に入れば、何時迄も逗留するだらう。こつちは是で四遍目だ。只さへ大分疲れて居る。況や綱渡りに

裕一ニウ

も劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障礙物がなくて
 さへ落ちぬとは保證が出来ぬのに、こんな黒装束が三個も
 前途を遮つては、容易ならざる不都合だ。愈となれば自ら運
 動を中止して、垣根を下りるより仕方がない。面倒だからい
 つそさう仕らうか。
 敵は大勢ではあるし、殊にはあまりこの邊には見馴れぬ
 人體である。嘴がおつに尖つて、何だか天狗の申し子のやう
 だ。どうせ質の良いやつでないには決つてゐる。退却が安全
 だらう。あまり深入りをして萬一落ちてもしたら、猶更恥辱
 だと思つて居ると、左向きをした鳥が、「阿呆」といつた。次のも
 眞似をして、「阿呆」といつた。最後の鳥が御丁寧にも、「阿呆、阿呆。」
 と二聲叫んだ。如何に温良な吾輩でも、是は看過が出来ない。

證—シヨウ

第一自己の邸内で、鳥輩に侮辱されたとあつては、吾輩の名
 前にかゝる。決して退却は出来ない。諺にも「鳥合の衆」といふ
 から、三羽だつて存外弱いかも知れない。
 進めるだけ進めと度胸を据ゑて、のそ／＼歩き出す。鳥は

諺—ことわざ



知らぬ顔をし
 て、何かお互に
 話をして居る
 らしい。愈、癩癩
 にさはる。垣根

挿繪 漱石筆 猫。

の幅がもう五六寸もあつたら、ひどい目に逢はせてやるの
 だが、残念な事にはいくら怒つても、のそ／＼としかあるか
 れない。

漸くの事、先鋒を去ること約五六寸の距離迄来て、もう一息だと思ふと、勘左衛門は申し合せたやうに、いきなり、羽搏きをして一二尺飛び上つた。その風が、突然吾輩の顔を吹いた時、はつと思つたら、つい蹈みはづしてすとんと落ちた。これはしくじつたと、垣根の下から見上げると、三羽とももとの處にとまつて、上から嘴を揃へて、吾輩の顔を見下ろして居る。圖太い奴だ。睨めつけてやつたが、一向利かない。背を丸くして、少々唸つたが、益だめだ。余が彼等に向つて示す怒の記號も、何等の反應を呈しない。考へて見ると無理もない。吾輩は今まで彼等を猫として取り扱つて居た。それが悪い。猫ならこのくらゐやれば、慥に應へるのだが、生憎相手は烏だ。機を見るに敏なる吾輩は、所詮無益と見て取つたから

綺麗に縁側へ引き上げた。もう晩飯の時刻だ。運動も好いが、度を過ぎすといかぬもので、全身が何となく緊りがない。ぐたぐたの感がある。しかのみならず、まだ秋の取りつきで、運動中に照りつけられた毛ごろもは、西日を思ふ存分吸収したと見えて、ほてつてたまらない。毛穴からしみ出す汗が、流れればと思ふのに、毛の根に膏のやうにねばりつく。背中がむづむづする。口の届くところなら、齧むことも出来る。足の達する領分は引き搔く事も心得にあるが、脊髓の縦に通ふ真中と來たら自力の及ぶ限りでない。かういふ時には人間を見かけて矢鱈にこすりつけるか、松の木で充分摩擦術を行ふか、二者其の一を擇ばねば不愉快で安眠も出来かねる。

—吾輩は猫である—

吸—キフ

二 森の繪

吉村 冬彦

暖かい縁に背を圓くして横になる。小枝の先に散り残つた枯れ木の紅葉が目に見えぬ風にふるへ、時に蠅のやうな小さい蟲が、小春の日光を浴びて、垣根の日陰を斜に閃めかす。眩しくなつた眼を室内へ移して鴨居を見ると、こゝにも初冬の「森の繪」の額が薄ら寒く懸つて居る。

中景の右の方は樫か何かの森で、灰色をした逞しい大きな幹はすく／＼と立ちならんで、次第に暗い奥の方へ續く。隙間もない茂りの緑は霜に稍さびびて、得も云はぬ色彩が梢から梢へと柔かに移り變つて居る。コバルトの空には玉子色の綿雲が流れて、遠景の廣野の果ての丘陵に紫の影を落

吉村冬彦 本名は寺田寅彦。理學博士。明治十一年東京市に生る。東京帝國大學理學部教授。

コバルト Cobalt. 淡く鮮青色。空色。

挿繪 森の繪の額。



す。森のはづれから近景へかけて、石ころの多い小徑がうねつてゐる處を、橙色の服を着た豆大の人が長い棒を杖にし、前に五六頭の牛羊を追うてとぼとぼ出て来る。近景には低い灌木が所々茂つて、中には箒のやうな枝に枯葉が僅かにくつつ付いて居るものもある。あちらこちらに伐倒された大木の下から、眞青な羊齒の鋸葉が覗いて居る。寧ろ平凡な畫題で、作者もわからぬが、自分は此の繪を見る度に、静かな田舎の空氣が畫面から流れ出て、森の香は薫り、鴨の

叫びを聞くやうな氣がする。その外にまだなんだか胸に響くやうな鋭い喜びと悲みの念が湧いて来る。廿年前の我が家のすぐ隣は叔父の屋敷、從兄の信さんの宅であつた。裏畑の竹藪の中の小徑から、我が家と往來が出來て、垣の向うから熟柿が覗けば、こちらから烏瓜が笑ふ。藪の中に一本大きな赤椿があつて、鴨の渡る頃は、落ち散る花を笹の枝に貫いて、戦遊びの陣屋を飾つた。木の空にはこを仕掛けて鴨を捕つた事もある。叔父の家は富んでゐて、奥座敷などは甘疊もあつたらう。美しい毛氈がいつでも敷いてあつて、欄間に木彫の龍の眼が光つて居た。いつか信さんの部屋へ遊びに行つた時、見馴れぬ繪の額

はご 細い割竹又は木の枝などに繻をつけたもの。

がかゝつて居た。何だと聞いたら、油畫だと云つた。其の頃田舎では石版刷の油畫は珍らしかつたので、西洋畫と云へば學校の臨畫帖より外には見たことのない眼に、始めて此の油畫を見た時の愉快な感じは忘れられぬ。畫は矢張り田舎の風景で、ゆるやかな流の岸に水車小屋があつて、柳のやうな木の下に白い頭巾をかぶつた女が、家鴨に餌でもやつて居る。何處で買つたかと聞いたら、町の新店に、こんな繪やもつと大きな美しいのが澤山に來て居る。ナポレオンの戦争の繪があつて、それも欲しかつたと云ふ。

ナポレオン Bonaparte
Napoleon (1769-1821)
ナポレオン一世。

家へ歸つて、夕飯の膳についても、繪の事が心を離れぬ。黄昏に袖無しを羽織つて、母上と裏の垣で寒竹筍を抜きながら、繪の事を思つて居た。薄暗いランプの光で寒竹の皮を

むきながら、美しい繪を思ひ浮かべて、淋しい母の横顔を見て居たら、急に心細いやうな氣が胸に吹入つて、睫毛に涙がにじんだ。何故泣くかと母に聞かれてなほ悲しかった。そんなに欲しければ買つて上げる。男の癖にそんな事ではと諭されて、更にしやくり上げた。母は蟲抑への藥を取出して吞ませてくれたが、あの時の自分の心は、今でも説明が出来ぬ。幼くて片親の手一つに育つて、餘り豊かでない生活が臍げに胸にしみ、浮世の木枯はもう周圍に迫つて居たから、何かの刺戟はすぐに譯のわからぬ悲みを誘うたのだ。
あくる日、錢を貰うて先づ學校へ行つたが、教場でも時々繪の事に心を奪はれ、先生に何か聞かれても、何を聞かれたか分らぬやうな事もあつた。放課のベルを待ちかねて學校

を飛びだし、信さんに教はつた新店を尋ねたら、すぐにわかつた。店へ這入ると、一面に吊した繪のニスの香に酔うてしまふ。あれも好い。これも氣に入つた。鍛冶屋の煙突から吹出る眞赤な焰が黒い樹に映えて、遠い森の上に青い月が出て居る繪も欲しかつたが、何となく靜かな此の森の繪にきめた。粗末な額縁をはめて貰つて、其の上を大事に新聞で包んで店を出た時は、心臟が高い音を立てて踊つて居た。
歸り途に舊城の後を通つた。御城の杉の梢は丁度此の繪と同じ様なさびた色をして、お濠の石崖の上には葉をふるうた椋の大木が、枯菫の中のつめたい水に影を落して居る。濠に隣つた牧牛舎の柵の中には、親牛と小牛が四五頭、愉快さうにからだを横にゆすつては寝て居る。自分もなんだか

嬉しくなつて、口笛をピュツ／＼と鳴らしながら飛ぶやうにして歸つた。

森の繪が引出す記憶には限りがない。豎一尺横一尺五寸の粗末な額縁の中に、あらゆる幼時の美しい幻が疊み込まれて居て、折にふれては畫面に浮出る。現世の故郷はうつり變つても、晝の中に寫る二十年の昔は、さながらに美しい。外の記憶がうすれて來るほど、森の繪の記憶は鮮かになつて來る。

他郷に漂浪しても、此の繪だけは捨てずに持つて來た。額縁も古ぼけ、紙も大分燻けたやうだが、森の繪はいつでも新しい。（藪柑子集）

一一 天徳寺琵琶を聴く

松平定信

北條の家臣に天徳寺何某といふものあり。毎度武功を顯しし身なり。或日いとまありけるにや、琵琶法師を招きて琵琶を弾かせけるに、その郎等宗徒の者共も皆列して之を聴く。折しも、天徳寺法師に向ひて、凡そ喜び樂しむことも興あるものながら、哀れなるは理も切に聞えて、その感もまた深し。願はくは、哀れなるかたを聞きたし。といふ。法師も諾しつつかの那須與一宗高が扇の的を射たりしことを語りければ、その曲も終らざるに、天徳寺雨雫と泣きて、ひたもの紙など出して涙をおしぬぐひけり。その曲終りて後、さて／＼哀れなることにて、覺えず落涙いたし候。も一つ哀れなること

松平定信 號樂翁。田安宗武の第七子。磐城國白河城主松平定邦の嗣と爲る。幕府の老中。文政十二年（二四八九）歿、年七十二。
天徳寺 佐野了伯・豊臣秀吉の臣、慶長六年（二二六一）歿、年四十四。

を。と好みければ、今度は佐々木四郎高綱が宇治川の先陣したりけるを語りけるに、これも前に同じく落涙數行に及びべり。

さて、その平家も終りて、法師も歸りければ、天徳寺、郎等の輩に打向ひて、さて、今の平家は哀れなることにて侍りき。汝等は如何聽きし。とありしに、郎等皆口を揃へて、面白きことに存じ候。たゞ一つ不審に存じ候は、君には哀れなることを二度まで御好みありしに、かの法師は哀れなることば語り候はて、いと勇しき華やかなることを語り候ひき。それには君にはひたもの落涙なされ候は、如何なることにて候にか。さて、合點參らぬことにて候。と申ししかば、天徳寺殊の外驚かれて、今まで汝等をば頼もしきものよと思ひし

に、今の一言にては誠に驚き入りたること、今よりは汝等をも見下し候なり。ひとへに我が家もこれぎりと思ゆるぞ。よく何れも聞き候へ。源平その時の合戦は、まことに安危存亡の分るゝところにして、志士皆死を極め忠を盡す時なり。然るところに、平家より扇を出して之を射よと好みしに、源氏の武者の中、一人この扇を射る者なくば、まことに他方に笑を残すといふものにして、且又源氏の勢の屈するところなり。それによりて、多くの武者の中に精兵を選ばれて、選び出されしは此の宗高なり。この時辭せんには、軍の供をも省かるべしといふことなれば、志士この大事の軍に中途にして歸りたらんは、如何ばかりか恥辱ならんと思ひきりて、馬を海中へ乗入れたり。折しも波風強くして、平家の舟浮沈上下

し、扇も定かに見え分かず。宗高心の中に祈願して射けるに、あやまたず要際かなめを射きり、扇の風に漂ひて波に浮かべるは、さながら秋の木の葉の風に随ふに異ならず。時に源平鳴りを静めてゐたりしが、此のさまを見て、陸にては箪たばを叩き、海にては舟ふねばたを叩きて感じ合へる聲、暫しの間は絶えざりきと語りたるにはあらずや。この時、與一辭して的に向はずば、腹切りて死すべし、又扇を射損じなば、同じく腹切りて死すべし。進退谷まるところにして、哀れなることの至極なり。扇の爲に腹切りて笑を後世に残すは、武士の身に取りて恥の上の恥なり。又佐々木四郎が宇治川を渡したるも同じことなり。頼朝公の祕藏して、友愛の蒲冠よあき者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ名馬を、厚き言葉の上高綱に賜はりし

箪



蒲冠者 源範頼。
梶原 源景季。

は、これにて宇治川の先陣をせよとの命なり。君命の重き言はん方なきに、重き賜を受けたる身なれば、是非先陣すべし。若し仕損じなば、これまた死になんとの心なり。凡そ人は死より外の重きことはなく、悲しきことはなし。今様々に心を勞し利欲に引かるゝも、皆命の惜しきゆゑにあらざや。その命を義によつて輕しとするは、武士の習なれども、武士の道ほど哀れなるものはなし。我も陣に臨みて、堅きをくだき強きをとりひしぐにつけても、陣頭に臨めば、いつも宗高・高綱の心にて出づるゆゑ、平家を聴きし時も、思ひやりて哀れに思ひたりき。妻子に引かれぬ人もなければ、命を惜しまぬ人もなし。それを思ひ捨てて、義によりて死ぬるは死にがたきものなり。その死ぬる時、人に譽められん、令名を揚げん、子孫

に功名を傳へんなどの心にては、死なるものにあらず。ただ君恩の有難き、臣の道の重きによりて死ぬる心ならずば、その欲を思ひ絶つことはならぬものぞ。汝等の戦功は、それにもよらず、匹夫の勇にして、もと實情より起らぬにてはなきか。と見ゆるなり。さて、頼もしからず。とて涙をこぼししに、郎等宗徒の人々も赤面して退きたりきとぞ。

—(大學講義)—

佐野ノ城主天徳寺了伯、北條氏ニ屬シテ驍名夙ニ顯ハル。嘗テ警師ノ琵琶ヲ善クスル者某ヲ招キテ平語ヲ演ゼシム。警師爲ニ二曲ヲ唱フ。一ハ佐々木高綱ノ事ニ係リ、一ハ那須宗高ノ事ニ係ル。了伯一曲ヲ聴ク毎ニ、嗚咽歎欷シテ已マザリキ。他日從容トシテ左右ニ問ヒテ曰ク、昨平語ヲ聴ク、若何ト。皆曰ク、甚ダ樂ムベキナリ。但ダ演ズル所ハ、皆赫々タル功名ノ事ニ係ル。シカルニ君獨リ泣キテ已マザリシハ何ゾヤト。了伯コレヲ聞キ、天ヲ仰ギテ大息シテ曰ク、吾今ニシテ汝等ノ我が用ヲ爲スニ足ラザルヲ知レリ。願フニ、高綱ノ鎌倉公ヲ辭スルヤ、ソノ愛スル所ノ愛馬ヲ乞ヒテ先登ヲ必スベカラザルノ前ニ約セリ。ソノ心固ヨリ生還ノ理ナシ。宗高馬ヲ兩軍屬目ノ中ニ立テテ、扇眼ヲ海波數百歩ノ外ニ射ントス。不幸ニシテ一發中ラズンバ、唯自ラ刎ネテ以テ海ニ投ズル有ランノミ。吾二子ノ心事ヲ推究シテ此ニ至レバ、則チ感慨悲壯、自ラ涕淚ノ睫ニ交ハルヲ覺エザル

佐野 群馬縣(上野國)高崎市の東南二軒。

咽歎欷シテ已マザリキ。他日從容トシテ左右ニ問ヒテ曰ク、昨平語ヲ聴ク、若何ト。皆曰ク、甚ダ樂ムベキナリ。但ダ演ズル所ハ、皆赫々タル功名ノ事ニ係ル。シカルニ君獨リ泣キテ已マザリシハ何ゾヤト。了伯コレヲ聞キ、天ヲ仰ギテ大息シテ曰ク、吾今ニシテ汝等ノ我が用ヲ爲スニ足ラザルヲ知レリ。願フニ、高綱ノ鎌倉公ヲ辭スルヤ、ソノ愛スル所ノ愛馬ヲ乞ヒテ先登ヲ必スベカラザルノ前ニ約セリ。ソノ心固ヨリ生還ノ理ナシ。宗高馬ヲ兩軍屬目ノ中ニ立テテ、扇眼ヲ海波數百歩ノ外ニ射ントス。不幸ニシテ一發中ラズンバ、唯自ラ刎ネテ以テ海ニ投ズル有ランノミ。吾二子ノ心事ヲ推究シテ此ニ至レバ、則チ感慨悲壯、自ラ涕淚ノ睫ニ交ハルヲ覺エザル

ナリ。今日弓箭ノ士、果シテ能ク二子ノ心ヲ以テ心ト爲
サバ、則チ何ノ戦カ勝タザラン。何ノ功カ成ラザラン。汝
等乃チ曰ク、ソノ樂ム可キヲ見テ、ソノ悲ム可キヲ見ズ。
吾是ヲ以テソノ能ク爲ス無キヲ知ルナリト。

原文漢文 一(大槻清崇、近古史談)一



武士道は、鎌倉時代の陶冶を經、戰國時代に至りては
益、發達し、徳川氏の世に至りて完成せられぬ。山鹿素行
が、「水精の瓶に秋の水を湛へ、白玉の盆に氷を載せた
らん如く、聊かも隠れたるところなき風情が大丈夫の
態度」といへるは、信にその精神を説明し得たるもの
なるべし。一に武勇を尙び、然諾を重んずること、二に義
理の許す範圍に於て人情を尙ぶこと、三に清廉を旨と
して財利を輕んずること、この三つを武士道の要素と
なす。
(藤岡作太郎「日本風俗史」)

大槻清崇 磐溪と號した。
舊仙臺藩士。明治十一年
歿、年七十八。

藤岡作太郎 東岡と號し
た。金澤市の人。國文學
者。文學博士。明治四十
三年歿、年四十一。

一三 豊太閤

矢野龍溪

古人に景仰すべき者甚だ多し。豊太閤の如き其の一人な
り。事業の宏壯、施設の警拔、氣宇の宏濶、度量の廣大、千古絶倫
と云ふべし。公の事業、施設は後世或は得て學ぶべし。其の氣
宇、度量に至りては殆ど望むべからず。公の人となり、を想ふ
毎に襟懷の爽然たるを覺ゆ。

我が國に未曾有なる應仁以來百年の大亂を定め、武威は
異域をも震動せしめ、天下懾服して、又一人の頭首を擡げ得
る者なき尊貴の地位に在る人として、左の一事あるを想ふ
時は、眼のあたり其の人を見るが如き心地す。

或時、太閤馬に乗りて烏丸通を參内す。新在家の下女四

矢野龍溪 名は文雄。舊豊

後國(大分縣)佐伯藩士。
文學者、政治家。昭和六
年歿、年八十二。

應仁 後土御門天皇の年
號。(二二二七—二二二九)
懾—シブ

烏丸通 京都の中央、御所
に通じる南北の通の一。

五人、赤前垂を掛けたるが出でて見物す。太閤馬上より見て宣ふ、「只今我内裏にて能をすべし。皆々見物に來よ。」と。又事を爲すに臨んで奇警迅速、一點も容態ぶらざるは左の一事にても知らる。



「太閤茶の湯を催し居給ふ所に、佐久間が中川を討ちし注進來る。太閤其の座より裳を捲り、えいや、えいや、とて馳け出で給ふ。御馬廻衆は追々に追ひ付き奉る。」
而して盛装の行列には唐冠を冠り鬚を附くるなど、其の

挿繪 秀吉畫像。

佐久間が云々 天正十一年（二二四三）、近江國賤が嶽の戰に佐久間盛政が中川清秀を破つた時のこと



唐冠

容態ぶれる有様又面白し。蓋し唐冠を冠るは信長の常になしたる風體を眞似たるなり。其の他公の奢は多く信長を手本とせり。聚樂伏見の宏壯は安土の結構を眞似たるに始まる。公の失は、自家の才略を恃み、古今の治亂を究めずして、戒慎の足らざるに在り。公は百年の大亂を定め、人民の塗炭の苦を救はんが爲に、此の世に出現せし偉物として見るべきのみ。

又公の明察にして苛ならざるは、左の一事にて知らる。
「山城の内山里と云ふ處を、梅松と云ふ坊主に預けらる。新に松を植えて程もなきに、松茸生ぜりとて献上す。太閤笑ひ給ひて、「我が威光誠にさもあらん」と宣ふ。それより數度獻ず。實は他處より求めて獻じたるなり。太閤左右の者

聚樂 京都に於ける秀吉の邸宅。
伏見 京都伏見の桃山の城。
安土 安土城。天正四年に信長が近江國蒲生郡安土村に築いたもの。

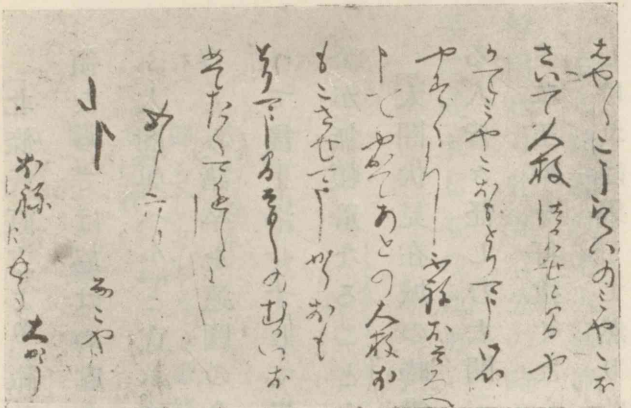
内山里 場所不明。

に、最早松茸獻ずることは止めさせよ。生え過ぐるぞ。」と宣ふ。公が大體に敏くして、物事に瑣細ならざる事は、左の一事に見ゆ。

「太閤柴田勝家を征する時、城に火の手の上るを見て、其のまゝ越中に赴き、佐々陸奥守を征し給ふ。勝家が首は見ざれども、さやうの事は何とも思はざるなり。公の無造作なるは左の如し。太閤氏郷を會津百萬石に封じ給ひつ。其の後、氏郷の出仕するや、太閤他事を問はずして、汝手を能く書けり。謠本を一番書きてくれよ。硯紙を持來れ。」と宣ふ。公も儉徳の心なきに非ざること左の如し。

柴田勝家 通稱修理亮。信長の臣。天正十一年（二二四三）歿、年五十四。佐々陸奥守。名は成政。秀吉に降つて後、肥後國に封ぜられた。天正十六年（二二四八）歿、年五十四。氏郷 蒲生氏。信長の臣。後、秀臣に従ふ。文祿四年（二二五五）歿、年四十。

「太閤高野山へ參詣の時、割粥を進めよ。」と宣ふ。暫くありて



うの奢をばせぬものなり。」と宣ふ。

料理人調へ參らす。太閤喜びて、高野山は白なき處なり。我が割粥を食はん事を知りて持ち來る。料理人才覺の至りなり。」と宣ふ。實は俄に多人數にて俎の上にて刻めるなり。後、話の序に申上げければ、大いに怒つて、無くば無しと言ひて、常の粥を出さんに何の仔細かあらん。我が力には、一粒づつ削りて食ふとも心のまゝなれども、さや

高野山 紀伊國（和歌山縣）伊都郡。頂上に眞言宗大本山金剛峰寺がある。

挿繪 秀吉の筆蹟。
はや／＼（こうらいのみやこおさいて人數つかはせ候間、やがてみやこおもとり可申候御心やすく候へく候ふねおそろへ申候てやがてあとの人數おもちさせ可申候からおもとり可申候間そもしのむかいおめてたく可進之候
五月六日 かしく
なこやより
大から
おねに返事

公が寛仁なること左の如し。
 「北條氏直方より、諏訪峠より東、八萬石の領地は氏直が領ならでは協はぬ處なり。こを渡されなば上洛せん。」と言ふ。太閤「與へん。」と宣ふ。諸臣同ぜず。太閤宣ふ、「八萬石の地を吝しみ、諸卒を遠國の合戦に勞せんこと不便なり。之を與へて後、上洛せずして異變あらば、其の時軍を發せん。」と。公が無頓着なること左の如し。
 「太閤伏見在城の時、鐵砲四五十ばかり放つ音す。座に在る人皆々怪しむ。太閤「大名ども鳥など打ちに出でて歸るさに、玉藥を打抜くならん。」とて嘲笑つておはす。見遣はしければ果して然り。此の者共聞きて、少し氣味悪しく思ひて、一兩日過ぎて御前に出づ。太閤笑つて宣ふ、「此の頃の

北條氏直 氏政の子。後、高野山に放たれた。天正十八年(一五九〇)歿、年三十。
 諏訪峠 信濃國(長野縣)諏訪郡。

遊び面白かりしか。とて、少しも心に掛け給はぬ體なり。」
 右の諸節は、老人雜話武功雜記備前老人物語の諸書より抄出せり。此等は公の時を去ること遠からざる頃の人々の手に成りしものなり。 (古人評論)

吉野山たれとむるとはなけれども今宵も花のかけにやどらん
 歸らじとおもふ家路を入相のかねこそ花のうらみなりけれ

露とおき露と消えにし我が身かななにはのことは夢のまた夢

(豊臣秀吉)

一四 史傳を讀むべし

大町 桂月

青年は如何なる書物を讀むべきかとの御尋に對し、卑見
左に申し述べ候。

人は何人も模擬性を有し居り候、また感染性を有し居り
候。而して一生の中此の二性の最も熾もつなるは、少年時代若し
くは青年時代に候。どちらかと申せば、模擬性は少年の方が
強く、感染性は青年の方が強く候。君子に接すれば君子に感
染し、小人に接すれば小人に感染し、豪傑に接すれば豪傑に
感染し、小才子に接すれば小才子に感染するものに候へば、
讀物の選擇も是より割り出さざるべからずと存じ候。

此の頃の青年の一般の缺點は、歴史傳記の知識に乏しき

大町桂月 名は芳衛。高知
市の人。文學者。大正十
四年歿、年五十七。

事に候。随つて今の青年は聖人、君子、英雄、豪傑、志士、仁人、大學
者、大宗、教家、忠臣、孝子などに接すること極めて少く、自然、人
物が小さくなり、眼界が狭くなりて、神經のみが尖り申し候。
是れ實に國家百年の大患に之あり、小生は請ふ、大いに史傳
を讀まれよ。」と大呼する者に候。又一つ今の青年に通じたる
缺點之あり候。それは個人的若しくは孤立的といふ點に候。即
ち前代と絶縁して、おのれ一代と思ふ考が餘りに強く候。隨
つて重厚雄大の氣風無くして、こせ／＼ちよ／＼する小
人物が多く候。これも史傳に親しまぬより起ることに候。史
傳を讀めば、積善の家には餘慶あり、積不善の家には餘殃あ
りといふことが、よく分り申すべく、行が自ら重厚になり申
すべく、人物もどつしりとして參り申すべく候。

雄一イッ

積善の家云々 易經の語。

厚一コッ

申すまでも之なく候へども、國家の盛衰興亡は全く人物の如何に存し候。盛んなる國も人物なければ忽ち衰へ、振はざる國も人物あれば忽ち振ひ申し候。我が國將來の發展に就いても、國民の人格を重厚雄大ならしむるが最大急務に之あり、人格を重厚雄大ならしむるには、史傳に親しみて偉人に感染するに若くは無しと存じ候。聖賢の遺著は、史傳を歸納したるものに候へば、史傳と共に常に座右に置き、日夕絶えず御讀誦成さるべく、さらば卑怯鄙吝の念次第に消えて、心が公明正大になり申すべく候。文學も古きものは精神の香たかく、人の心を淨化致し候へども、近時の文學は動もすれば人を誤るもの多く、其の選擇には深き注意を要し候。

—(新學生訓)—

遺一キ

怯一ケン

一五 大海の日の出

徳富健次郎

枕を撼かす濤聲に夢を破られ、起つて戸を開きぬ。時は明治二十九年十一月四日の早曉、場所は銚子の水明樓にして、樓下は直ちに太平洋なり。

午前四時過にもやあらん、海上なほほの暗く、波の音のみ高し。東の空を望めば、水平線に沿うてくすぶりたる樺色の横たはるあり、上りては濃き藍色の空となり、こゝに一痕の弦月ありて、黄金の弓を掛く。光さやかにして、さながら東海を鎮するに似たり。左手に黒く差出でたるは犬吠岬なり。岬端の燈臺には廻轉燈あり。陸より海にかけて、しきりに白光の環を描きぬ。

徳富健次郎 號は蘆花。熊本縣の人。昭和二年歿、年六十。

銚子 千葉縣海上郡。

犬吠岬 千葉縣海上郡に屬する。利根川河口、太平洋に斗出する岬。

暫くする程に、曉風冷々として青黒き海原を掃ひ來り、夜の衣は東より次第に剝けて、蒼白き曉の波を踏みて此方へ此方へと近寄る状も指點すべく、磯の黒きに濤の白く打懸るさまも漸く明かになり來りぬ。眼を上ぐれば、黄金の弓と見し月は何時しか白銀の弓と變り、くすぶりて見えし東の空は次第に澄みたる黄色を帯び來りぬ。森々たる海原に立つ波の、腹は黒うして背は蒼白く、夜の夢はなほ海の上にさまよへど、東の空はすでに瞳を開きて、太平洋の夜は今明けんとするなり。

已にして曙光は花の開くが如く、圈波の廣まるが如く、空に水に廣がり行きて、水いよ／＼白く、東の空ます／＼黄ばみ、弦月も燈臺もわれと薄れ行きて、果てはありとも見えぬ

森々ーペウベツ

なりぬ。此の時、日の使とも覺しき渡鳥の一群、鳴きつれて海原を掠めて過ぐれば、大海の波といふ波は悉く爪立ちて東の方を顧み、一種待つあるのさゝめき――
！聲なき聲四方に滿つ。

五分過ぎ、十分過ぎぬ。東の空に見る見る金光射し來り、忽然として猩紅の一點海端に浮かみ出でぬ。すはや、日出でぬと思ふ間もなく、息をもつがせず、瞬く間もなく、海神が手もて擎ぐるまゝに、水を出づる紅點は金線となり、黄金の楯となり、金蹄となり、一搖して名残なく水を離れつ。水を離るゝ其の時遅く、萬斛の金たら／＼と昇る日より滴りて、萬里一瞬、此



挿繪 大味呷。

方を指して長蛇の如く大洋を走ると思へば、眼下の磯に忽
焉として二丈ばかり黄金の雪を飛ばしぬ。

—(自然と人生)—

静かなる秋の空に、ちぎれ〜に漂ひたりし浮雲、西の方へ
移りゆきて、日漸く傾きぬ。風も吹きたえたる夕方の青空、暫
くは水のやうに澄みて天地共に静かなり。陽は今や残りの
光をば悉く天の一方に放つて没せんとす。

日は既に没し盡くしぬ。雲は五彩をすてて、悉く蔷薇色とな
り、名残の光しばらくは天の一方に輝く。夕風涼しく吹き渡
れば、浮かべる雲の影いつしか消えて次第に暮れそめ、星一
つ二つ輝き出づる頃には大空鏡の如く青し。(坪内逍遙)

坪内逍遙 名は雄藏。文學
博士。早稻田大學名譽教
授。昭和十年歿、年七十
七。

一六 初まゐり

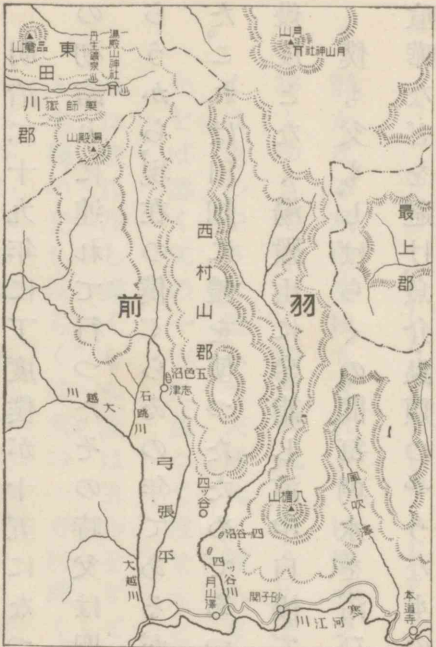
齋藤 茂吉

明治二十九年に丁度僕が十五になつたので、父は湯殿山
の初詣りに連れて行つた。その時父は四十五六であつた。だ
らうから、現在の僕ぐらゐの年であるが、もう腰が屈つてゐ
た。これは田畑に體を使つたためであつた。しかしそれまで
幾度となく湯殿山に參詣し、道中自慢であつた。

僕も父も、しばらくの間毎朝水を浴びて精進し、その間に
喧嘩などを避け、魚介、蟲類のやうなものでも殺さぬやうに
し、多くの一厘錢を一つ〜鹽で磨いて賽錢に用意した。參
詣というても、今時のやうに途中まで汽車で行くのではな
い。夜半にならぬ頃に出立して、夜の明けぬうち五六里は歩

齋藤茂吉 明治十五年、山
形縣に生る。東京帝國大
學醫學科出身。醫學博士。
歌人。
湯殿山 山形縣の西村山。
東田川の二郡の郡境に聳
ゆる月山火山の一雄峰。
出羽三山の一。山中に國
幣小社湯殿山神社鎮座。

くのである。第一日は本道寺といふところに泊つた。そこま
では村から行程十四里である。第二日は、まだ曉にならぬう
ちに志津といふ村に着いて、そこで先達を頼んだ。それから



の山道は、雪解けの
水を渡るといふや
うなところが度々
あつた。まだ午前で
あつたが、湯殿山の
谿合にかゝると風
の工合があやしく
なつて来て、とう／＼御山は荒れ出して来た。豪雨が全山を
撫でて降つてくるので、笠は飛んでしまひ、蓆もちぎれさう

本道寺 山形縣(羽前國)西
村山郡本道寺村。
志津村 山形縣(羽前國)西
村山郡志津村。

挿繪 湯殿山附近要圖。

である。大木の枝が目前でいくつも折れた。それでも先達は
ひるまずに、「六根清淨、御山は繁盛」と唱へて行つた。さうする
うち、渡るべき前方の谿は一めんの氷でうづめられて、それ
が雨で洗はれて滑々になつてゐる。下手の方は深い谷に續
いて、ひどくあぶないところである。僕は恐る恐るその上を
渡つて行つたが、そこへ猛風が何ともいへぬ音を立てて吹
いて来た。僕は轉倒しかけた。うしろから歩いて来た父は、「茂
吉匍へ。べたつと匍へ。」と鋭い聲でさういつたから、僕は氷の
うへに匍つた。やつとのことでしがみついてゐたといふ方
が好いかも知れない。さういふことを僕はおぼえてゐる。
「語られぬ湯殿にぬらす袂かな。」といふ芭蕉の吟のあるそ
の湯殿の山に僕は參拜して、初詣りの願を遂げた。鐵の鎖で

芭蕉 松尾氏。名は宗房。
伊賀國(三重縣)の人。俳
人。元祿七年(二三五四)
歿、年五十一。

辛うじて谿底の方へくだつて行つたことだの、それから、谿間の巖から湯が威勢よく湧いてながれてゐるところだのをおぼえてゐる。もどりに志津に一泊して、びしよぬれの衣服をほした。この行程十六里と稱なまへられてゐる。

第三日は、麗らかな天氣に歸路に就いた。七八里も来たころ、父は茶屋に寄つてぬた餅を注文した。ぬた餅といふのは枝豆を搗鉢で搗つて砂糖と鹽で鹽梅をつけて、餅にまぶしたものである。父は「茂吉なんぼでも食べろ。」と云つた。それから、道中をするには腹を拵へなければ駄目である。山を越す時などには、麓で腹を拵へ、頂上で腹を拵へて、少し物を持つて出懸けるとよい。などといつて、なか／＼上機嫌であつた。もう山形の街も近くなつたころ、當時の中學校で歴史を

山形 山形市。

擔任してゐる教諭の著はした日本歴史が欲しくなり、しきりにそれを父にせがんだ。その日本歴史は表の様に出來てゐて、工面くわめんのよい家の子弟は必ず持つてゐたし、小學校でも先生が教場に持つて來たりするので、僕は欲しくて欲しくてたまらなかつたものである。然るに、父はどうしてもそれを買つて呉れない。僕は山形の街に入つた。僕は幾たびも頼むが父は承諾しない。そのうち、書物の發行書店のまへを通りすぎてしまつた。僕は、なぜ父はそんなに吝嗇しんさくだらうかなどと思ひながら、父の後ろを歩いたのであつた。

一(念珠集)一

一七 甕わり柴田

湯 淺 常 山

永祿十二年、佐々木承禎、柴田勝家が守るところの長光寺の城を圍み攻めて、遂に總がまへを打ち破る。勝家、本丸にありて、こゝを先途と防ぎ戦ふ。

郷民、佐々木が陣に行きて、この城は水の手遠く、遙かなる所より水をとる候。それをとるほどならば、城は保つべからじ。と告げ知らせければ、承禎喜びて、水の手をとる切つたり。城中、これに苦しめども、弱れる色を表はさず。承禎、これを見んために、和平せんとて、平井甚介を使にして、城中に入れたり。平井、勝家に對面し、手水を請ふ。甕に水満ちたるを、小姓兩人してかき出でたるに、平井手を洗ひければ、小姓、殘れ

湯淺常山 名は元禎。岡山藩士。儒者。天明元年(二四四)歿、年七十四。

永祿十二年 正親町天皇の御代(二二二九)。

佐々木承禎 名は義賢。承禎は入道してからの號。

近江國觀音寺の城主。

柴田勝家 九二頁註參照。

長光寺 近江國(滋賀縣)蒲生郡武佐村の地名。東山道の要路に當る。

總がまへ 城の本丸に對し、それよりも外の總ぐるわをいふ。

手水一てうづ。

る水を庭に捨てたり。平井、歸りてかくといへば、事のたがひたるゆゑにあやしみあへり。

かくて城中既に水盡きければ、勝家、明日は撃つて出て、切り死せん。とて諸士を集め、^{一、半、後}最期の酒宴す。殘れる水を問へば、二石ばかり入るべき甕をかき出す。さらば、この間の渴をやめよ。とて、人々汲みのみてければ、勝家、薙刀の石づきにて甕を碎きたり。夜明方に門を開き、撃つて出づ。佐々木、思ひも寄らざれば、大いに敗北し、勝家、首八百餘級を得て、岐阜に獻ず。信長、感狀を與へ、賞せらるゝこと大方ならず。これより勝家を甕わり柴田と世に稱しけり。

永祿十二年、柴田勝家、織田氏ノ爲ニ長光寺ノ城ヲ守



ル。佐々木承禎圍ミテコレヲ攻メ、遂ニソノ外城ヲ破ル。勝家退キテ牙城ヲ保チ、防戦甚ダカム。偶、人ノ佐々木氏ニ告グル者アリ。曰ク、此ノ城水ニ乏シ。若シソノ汲路ヲ絶タバ、城下スベキナリ。ト。承禎悦ビテコレニ從フ。城中果シテ困シム。シカレドモ未ダソノ旗色ヲ變ヘズ。承禎コレヲ怪ミ、乃チ和議ニ託シテ、平井某ヲ城中ニ納ル。勝家將ニ出デテコレニ接セントス。平井、手ヲ洗ハンコトニ請フ。勝家命ジテ水ヲ巨盤ニ盛り、二人ヲシテ左右ニ捧ゲテコレヲ致サシム。平井洗ヒ終レバ、スナハチ餘水ヲ庭ニ棄テ、復タ愛惜スル意ナシ。平井コレヲ視テ、色然トシテ歸ル。既ニシテ儲水殆ド盡ク。勝家、脱スベカラザルヲ度リ、諸將士ヲ會シテ、酒ヲ置キ訣飲ス。時ニ餘ス所

ノ水ヲ問ヘバ、則チ僅ニ二斛ナリ。勝家眉尖刀ヲ呼ビ、其ノ鐵ヲ以テ水缸ヲ撞キ、以テ必死ヲ示ス。曉ニ乗ジテ門ヲ開キ、吶喊シテ圍ヲ潰シテ以テ出ヅ。佐々木氏ノ兵ソノ不意ニ出ヅルヲ以テ、狼狽擾亂シテ、復タ止ムベカラズ。勝家機ニ乗ジテ衝突シ、首ヲ斬ルコト八百餘級、人ヲシテコレヲ岐阜ニ獻ゼシム。信長大イニ悦ビ、勳狀ヲ賜ヒテ以テコレヲ賞ス。世、勝家ヲ呼ビテ破缸柴田ト爲ス。

原文漢文

—(大槻清崇、近古史談)—

一八 長四郎の不敵

新井 白石

伊豆守源信綱は右衛門大夫正綱が子、實は大河内金兵衛入道休心が孫、金兵衛久綱が嫡男、伯父正綱に養はる。慶長九年七月、左大臣家御誕生ありし時、信綱僅か九歳にて若君の御家人になさる。信綱、童名長四郎と申す。

或時、若君、大殿の御寢殿の屋の軒端に、雀の巢をくひ子を生みたりしを此方より御覽じて欲しがらせ給ひ、長四郎取りて参らせよ」とあり。長四郎年十一歳の時なれば、如何にも叶ふまじきよし辭しければ、晝は驚きて飛び去る事もありなん。巢くひし處よく見置きて、日暮れて、此方の屋の軒端さして登り、彼處に忍び行きて取るべし。おとなは身重く足音

新井白石 名は君美。江戸の人。徳川時代の政治家。學者。享保十年（二三八五）歿、年六十九。
 信綱 武藏國（埼玉縣）川越の城主。寛文二年（二二二二）歿、年六十七。
 慶長 後陽成・後水尾兩天皇の御代の年號。（二二五六一—二二七四）
 左大臣家 徳川家光を指す。
 大殿 徳川二代將軍秀忠を指す。

もしなん。只汝取りて参らせよ」と候ふ人々の教へしかば力なく、日暮れて、此方の屋よりして傳ひ傳ひ行く。



既に御寢殿の軒に到りて取らんとせしに、踏み損じて、御壺の内へどうと落つ。將軍家御刀取つて、障子引明け給へば、御臺所燈火取つて出でさせ給ひ、御覽するに、長四郎にてありけり。將軍家不思議に思召されて、汝は何しに此處には來りぬるぞ」と御尋ねありしに、「今日の晝、この御殿の屋の軒端に雀の子生みたるを遙かに見て、餘り欲しさに参りて候」と申す。將軍家「いや、おのれが心にはあらじ。誰か教へけるぞ」と色々に御推問あれども、幾度も初め申せ

挿繪 家光肖像。

雀すずめ

し言葉に變らず。おのれ、事の由ありの儘に申さず争ひぬるこそ、年比にも似ぬ不敵なれ。」と仰せられて、大きな袋の中に押入れて、御手づから口を封じ、柱に懸けさせ給ひ、事の由ありの儘に申さざらん程は、何時までも斯くて候へ。」と仰せけれども、尙争ひ申す事初めの如し。

夜既に明けて常の御座に出てさせ給ふ。御臺所は夙く心得させ給ひて、彼幼き心にて、身の悲しさを顧みず、竹千代君の仰なりと申さざる事を深く感じ給ひて、女房達に仰せて、朝かれひ召して、「これたうべよ。」とて賜はりて、又御手づから元の如くに縫はせ給ひて置かせ給ふ。

晝のほど將軍家入らせ給ひ、又御推問ありしかど、終に言葉を変へず。御臺所御詫言ありしかば、更に向後の事を慎む

幼し—をさなし

竹千代 徳川家光の幼名。

べき由仰せて御許あり。將軍家御臺所に向はせ給ひ、彼が今の心にて生ひ立ちたらんには、雙びなき忠臣にて候らんものぞ。」と、殊の外悦ばせ給ひしとなり。

—藩翰譜—

伊豆守曰く、我が實父も、養父も家康公、秀忠公に召使はれて、御才覺と御家法とを能く能く存じたり。我は幼少の頃より正坐して實父、養父の教を謹聽せり。秀忠公、家光公の御側に晝夜相勤めたり。御次に丸寢して、段々承ることを考へに考へたり。斯くて足には胼胝たこが出来たり。心には才覺が出来たり。」と、嗚呼、伊豆守の智慧は正坐謹聽の賜なり。今の世の青年、多く放縱、我執に陥れり。大成せざるも宜なるかな。若し大成せんと思はば、伊豆守の足だこに就いて反省せざるべけんや。

(大町桂月)

藩翰譜 十三卷。慶長五年から延寶八年までの間の一萬石以上の諸侯三百三十七家の傳記・沿革・勲功等を記したるもの。

才覺 「智慧の意」

一九茶話

薄田泣菫

細川幽齋はいろんなことに通曉してゐた。武術はいふに及ばず、その頃古今傳授を受けた。たつた一人の男は彼だつたといふので、歌の方の造詣もほゞ察することができよう。茶も上手で、とりわけ料理がうまかつた。この方では相當自信を持つてゐた利休なども、幽齋の前には一寸頭があらなかつたらしく、ある時などはわざ／＼頼んで、鶴の料理のお手前を拜見に往つたことがあつた。

幽齋が頓才があつて、歌の詠み口の早かつたことは、かなり名高い話である。ある時、わが子の三齋と連れ立つて烏丸家を訪ねたことがあつた。主人の烏丸殿は細川が二人顔を揃へてゐるのを見て、

「細川二つちよつと出にけり」
といつて、ちよつかいを出された。すると、幽齋は即座に、

「御所車通りしあとに時雨もて」
とつけたので、烏丸殿も感心するよりほかには言葉がなかつたさうだ。その日、幽齋が暇乞ひして歸らうとすると、烏丸殿はわざ／＼玄關まで見送つて出られたが、こつそり家來の一人に耳打ちをして、だしぬけに幽齋を後から玄關の式臺の上に突倒させた。おそろしく近代的なお公家さまで、歌よみを優遇するよりも、苛めることを知つてゐる。そしてこの歌上手の老人が蛙のやうな恰好をして、まご／＼してゐる間に、

薄田泣菫 名は淳介。詩人。明治十年岡山縣に生る。

細川幽齋 名は藤孝。慶長十五年(二七〇)歿、年七十七。
古今傳授一コキンデン

造詣一ザサケイ

利休 千宗易の號。泉州堺の茶人。天正十九年(二二五)歿、年七十一。

お手前一おてまへ

三齋 細川忠興の號。正保二年(三〇五)歿、年八十二。

烏丸家 藤原光廣をいふ。寛永十五年(二二九八)歿、年六十。

御所車一ごしよぐるま

式臺一しきだい

苛める一いぢめる

「細川殿たつた今、一首所望いたす。」

と浴びせかけたものだ。すると、幽齋は腰を擦りくく起きあがりさま、

「とんとつくころりと轉ぶ幽齋がいつの間よりか歌をよむべき」

と歌つたので、悪戯なお公家さんも手を拍つて嘆賞するよりほかに仕方がなかつた。

また、ある大名が幽齋を困らさうと思つて、どうぞ歌一首のうちに「ひ」の字を十入れて作つてみてほしいと、難題をいひ出した。

幽齋はちよつと思案をしたが、こんな手品師のやうなことは平素仕馴れてゐるので、何の苦もなく、

所望—ンヨマツ。

「日本の本の肥後の火川の火打石日々にとふたひろふ人々」

と、詠んでみせた。大名はこりずに、またく難題を出して、今度は、歌一首のなかに「木」を十本詠み込んでみせてほしいといひ出した。

箱庭作りのやうに器用な幽齋は、何の造作もなく、有合せの檜と椽と桐と櫛と柿と椎と松と杉と柚と桑とを詠み込んで見せたものだ。

すると、大名はぜんまい仕掛の玩具でも見せられたやうに、首を捻つて感心してしまつたといふことだ。歌の話が出たから、これは幽齋ではないが、今一つ歌の話をつけ加へよう。連歌師の山崎宗鑑が、ある時さるお公家さ

山崎宗鑑 天文二十二年
(二二一三)歿、年八十九。

まを訪ねたことがあつた。公家は宗鑑に、自分は近頃えらい發明をした。それは歌のどんな上の句にでも、くつ附けることの出来る下の句だと、出来ることなら農商務省に願ひ出て、專賣特許でも取つておきたいやうなことをいひ出した。宗鑑がどんな句だと訊くと、公家は自慢さうに、

「といふ歌はむかしなりけり」

といふのだと答へた。宗鑑は鼻の上に皺をよせて笑つた。

「御前、これはやつぱりお公家さまのお詠みになつた下の句でございますね。私共の方ではちと趣向が違ひまして、かういふ下の句をつけます。」

といつて、それにつけても金の欲しさよといふ句を書いてみせた。公家はそれを口の中でよんでみて、そしてそれを自

農商務省 大正十四年農林省と商工省に分れた。

趣向—シユカウ。

分の知つてゐる古今集や百人一首のいろんな歌にくつ附けてみた。ところが妙なことには、この下の句はどの歌にもよく附いて、少しの縫目がみえなかつた。

「それにつけても金の欲しさよ。」

實際よく附くと思はれたのに不思議はなかつた。そのお公家さんは、貧乏な宗鑑と同じやうに金が欲しくて仕方がなかつたのだから。

—茶話全集—

古今集 古今和歌集。二十卷。最初の勅撰和歌集。百人一首。天智天皇より順徳天皇に至る百人の歌人の歌一首づつを撰び集めたもの。
縫目—ぬいひめ

元朝の見るものにせむ富士の山
手をついて歌申しあぐる蛙かな

(宗鑑)

二〇 花 咲 爺

武者小路實篤

武者小路實篤 明治十八年
東京市に生る。小説家。

大名 二十七八歳。

大名 花咲爺と慾張爺を呼べ。
侍 はつ。(退場。)

奥方 花咲爺は本當に花を咲かせるでございませうか。

大名 それは自分で見ない間は信じられない。しかし現在見た者がある以上は、嘘だと云ふことも出来まい。しかし不思議なのは枯木に花を咲かせることではない。

奥方 それなら何が不思議なのでございます。

大名 それは、今時に花咲爺のやうな人間がこの世に居ると云ふことだ。自分の大事にしてゐる犬を殺されても、少しも怒らず又恨まずに、又白を平氣で貸すと云ふことだ。そ

してその丹誠した白を焼かれても怒らないと云ふことだ。それに、花咲爺の不斷の心がけや行を聞けば聞く程感心な者だ。さすがに枯木に花を咲かせるだけの者だと思へる。わしは、この世にそんな人間があるとは思はなかつた。花を咲かせることは珍しい。しかし花咲爺の心こそなほ美しい、なほ賞めなければならぬ。

奥方 本當でございませぬ。それにしても慾張爺はひどい人でございませぬ。

大名 ひどい奴だ。だが、わしにはそいつの心の方がわかる。しかし、そんな善い人のわきに居ながら、その人を信じることが出来ないで、常に疑ひ憎むと云ふのは又珍しい男だ。花咲爺に花が咲かせられれば、自分にも花を咲かせるこ

とが出来ると、性しやうも懲りもなく思つてゐる。同じ灰さへ持てば同じことが出来ると思つてゐる。灰を生かすのは花咲爺の不斷の心がけだ。又其處が貴いのだ。

奥方 あなたはその慾張爺もお呼びになつて、こゝで花を咲かせさせて見ようとおつしやるのですか。

大名 さうだ。俺は同じ灰がちがふ人間によつてどんな働をするか、この目で見たいのだ。

奥方 慾張爺に花が咲かせられるでございませうか。

大名 誰も見たものはない。けれど咲かない處も見たものはない。しかし世間の噂が本當なら花は咲くまい。灰は蛆むしか何かにかはらなければならぬ。

奥方 蛆にかはられてはたまりませんね。

大名 しかし何か並の人とはかはつたことをするだらう。善意を悪意にとり、恩を仇に思ひ、善人を偽善者にし、強情我慢を通す奴だから。

(花咲爺と慾張爺同じ姿で、同じ箆へらに灰を入れて持ち、登場大名の前に畏まる。)

大名 正兵衛、慾兵衛、今日は御苦勞である。

兩人 はつ。

大名 誰か、正兵衛と慾兵衛の灰をまぜてやれ。正兵衛の持つてゐる灰を半分慾兵衛のに入れ、慾兵衛のを半分正兵衛のに入れて、よくまぜてやれ。

侍 はつ。(侍言はれた通りにする。)

大名 正兵衛、それならお前から先に、あの木の東に出てゐる

枝に花を咲かせてやれ。

正 畏まりました。出来るだけやつて御覽に入れます。併し私の力ではございせんから、仕損じましても御宥し下さい。

(枯木に梯子が懸けてある。正兵衛それに乗る、何か念じながら灰をまき、花が咲く。)

大名 (立ち上り) でかした、花咲爺。今日からお前は世間の云ふ通り花咲爺と名乗るが、いゝでかした、でかした。

正 (下りて畏まり) 恐れ入ります。

大名 お前が花を咲かせたのを見ても、お前の不斷の心がけがわかるやうに思はれて、おしも嬉しく思ふぞ。用意の寶物を持つて来て、花咲爺に與へよ。

侍 はつ。

大名 どうだ、皆の者、心を美しくもてば、いつか知れずには居らないものだ。それにしてもよくお前は長い間辛抱したな。わしはそのことを花が咲いたより嬉しく思ふぞ。自分が花を咲かせたやうに後の世にまで語り傳へて威張りたい氣さへする。(待寶物を正兵衛の前におく。惣兵衛横目でじろりじろり見て居る。)

大名 花咲爺、花を咲かせた褒美ぢや、僅かだが收めてくれ。

正 過分に存じますが、御言葉に背くのも恐れ入りますから、有難く頂戴致します。(御辭儀をし、以前の位置にさがる。)

大名 さて惣兵衛、その方も花を咲かせて見よ。花咲爺にやつた寶物より、もつと價の高い寶物をやるぞ。

愆 この灰に正兵衛の呪の息がかゝつて居りませんければ、きつと咲かせてお目にかけます。

大名 お前はまだ正兵衛を恨んでゐるな。

愆 花が咲けば、この恨もなくなるでございませう。それまでは恨まないわけにはいきません。私は正直者です。腹に思つたことは何處でも云はないではゐられません。

大名 それは感心な心がけだ。花を咲かせよ。

愆 咲かせてお目にかけます。褒美は必ず下さるでございませうね。

大名 花さへ咲かせたら必ずやる。

愆 正兵衛さんのよりもつといゝのを下さいますね。

大名 もつといゝのをやる。花を咲かせたら。

愆 (獨語のやうに) そんな事が出来ないで。俺でも人間だ。

(愆兵衛、同じ恰好して梯子にのり、無造作に灰をまく。花が咲かない。皆笑ひ出す。しきりにまく。いらだつて残らずまく。灰が正兵衛をぬかして皆の目や口に入る。とうとう、殿様の目に入る。耐へて居た殿様、烈火のやうに憤り立ち上る。)

大名 もう灰をまくのはよせ。誰か早く愆兵衛をとりおさへよ。聞きしにまさりしひどい奴だ。早速、愆兵衛の首をはねよ。(侍愆兵衛をおさへつける。)

愆 どうぞお助け下さい。お助け下さい。

大名 いや、わしは腹に思つたことはお前のやうに行はないわけにはいかない。お前が犬を殺したやうに、わしはお前を殺さなければならぬ。

惣 お助け下さい。お助け下さい。命ばかりはお助け下さい。
大名 いや、わしは助けることは出来ない。すぐ惣兵衛を
つれて行つて首を刎ねよ。

侍 はつ。

正 一寸お待ち下さい。

大名 なんだ。

正 どうか、惣兵衛さんの命はお助け下さい。お言葉に背い
て失禮ではございますが、お殺しになるのはお宥し下さ
い。

大名 お前は、惣兵衛の殺されるのを氣持よく思はないか。

正 思ひません。惣兵衛さんは腹の底からわるい方ではご
さいません。あの姿を見たら、誰でも同情しない方はない

筈だと存じます。どうかお殺しになるだけはお宥し下さ
い。

大名 お前にやつた寶物をのこらず返せば、惣兵衛の命はゆ
るしてやる。どうぢやな。

正 お返しします。お返しします。

大名 惣兵衛、正兵衛に禮を云へ。

惣 それが正兵衛の策略だ。誰が禮を云ふものか。

大名 それなら貴様は首がはねてもらひたいのか。禮を云ふ
のがいやなら首をはねるぞ。

惣 (怒つたやうに) 正兵衛さん、有難う。御蔭で、お前さんは寶
物を失つたね。

大名 そいつを連れて行け。

侍 はつ。(慾兵衛をつれてゆく。沈黙)

大名 花咲爺。わしはお前が花を咲かせたよりも、寶物をかへしてまでも、慾兵衛の命を助けようとした心を嬉しく思ふぞ。誰か、もつと寶を持つて來てやれ。

侍 はつ。(侍間もなく以前にまさる寶物を持つてくる。)

大名 花咲爺。わしはお前のやうな人間をこの目で見、この心で感じる事が出來たのが嬉しいのだ。この寶はお前の心に任せる。

正 はつ。(平伏する。涙ぐむ。沈黙) —幕—

—武者小路實篤全集—

二 藤樹先生

橋 南 谿

中江藤樹先生は、俗稱を與右衛門といひ、江州大溝在なる小川村の百姓の家に生れ、學、王陽明の流を汲みて、その德行一世に秀で、遠近皆その風を望まざるはなかりきといふ。先生の歿後、尾州の一士人、江州を過ぎける途次、ふと先生の墓所小川村に在りと聞き、その村に尋ね行きて、路傍の農夫に向ひ、「先生の墓所は」と問へるに、農夫は「畑道なれば知れ申すまじ。案内致し參らせん。」とて、士人を導きて行きけり。ほどなく小さき藁屋の前に出でけるが、「暫し待ち給へ。」とて農夫は内に入り、やがて出て來るを見れば、木綿の新しき着物のうへに、紋附きたる羽織を着たり。士人は驚きて、さても丁

橋 南谿 宮川氏、名は春暉。伊勢の人。醫を業とし、東西を漫遊した。文化三年(二四六六)歿、年五十三。
中江藤樹 名は原 儒者。慶安元年(二三〇八)歿、年四十一。
江州 近江國。
大溝 今、滋賀縣高島郡大溝町。
小川村 今、高島郡青柳村に屬す。
王陽明 名は守仁。明の大儒。明の世宗の八年(皇紀二一八九)歿。
尾州 尾張國。
墓所 青柳村小川の玉林寺内。

寧なる男かなと思ひて、附きて行くほどに、やがて墓所に到りぬ。農夫は竹垣の戸を開き、「いざ入りて拜し給へ。」といひて、



先生の家來筋の者なるか。」と問ひぬ。農夫は詞を改めて、「さには候はず。されどこの村の者は、一人として先生の御恩を蒙らざるものなし。我等が親を敬ひ子を慈しむことを辨へ知

その身は戸外に退きて、恭しく拜伏せり。士人はこの様を見て再び驚き、さては衣服を改めたるは、我に對する爲にはあらで、先生を敬する爲にてありけるよ、と思ひつきければ、農夫に向ひて、「汝は藤樹

挿繪 藤樹肖像。

りたるは、皆これ先生の御恩なれば、子々孫々必ずその御恩を忘るべからず。」と、わが父母常に教へ給ひき。」と答へたり。士人はそのはじめ、只何となく一見せんとの心にて來れるが、この農夫の舉動によりて俄に敬慕の念を起し、懇にその墓前に禮拜して歸りきとぞ。

この一事、以て先生の徳行のいかに高くして、またその化育のいかによく下に及びしかを見るに足らん。熊澤蕃山は先生の門人なり。この人の先生に従ひし始を尋ぬるに面白き話あり。

その頃、加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ上るに、江州河原市より馬を雇ひて、榎木の宿に至りて泊りぬ。馬方、河原市に歸りて、馬を洗はんと鞍を解きつれば、財布一つ出

化イクラ

熊澤蕃山 名は了介。備前侯池田光政に仕へた。元祿四年(二三五一)歿、年七十三。

河原市 近江國(滋賀縣)高島郡。榎木の宿 同國滋賀郡。

てたり。取りあげて見れば、金二百兩あり。大いに驚き、いそぎ
 榎木に走り行きて、かの飛脚の
 宿れる家に到り、對面して委し
 く尋ね問ふに、相違なければ、そ
 の金を取出して返しけり。飛脚
 は死したる者の蘇りたる心地
 して、行李より別の金子十五兩
 を取出して馬方に與へ、もしこ
 の二百兩なくば、わが一命を失
 ふのみならず、親兄弟までも重
 き罪に行はれん。さればこの恩
 なかく、言葉のいひ盡すべきにあらず。まづ當座の御禮ま



挿繪 藤樹書院。

でにこれを贈り奉る。」と、涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚ける
 顔色にて、「そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の禮いふ
 ことかあるべき。」とて、手にだに取らず。

色々にこしらへいへども、更に受けずして歸らんとする
 故、止むことを得ず、十兩となし、五兩となし、三兩となし、段々

減じて遂には金二歩となし、せめてこればかりは。」と、理を盡
 し詞を盡していふに、「この金を受くるほどならば、二百兩を
 も留め置くべし。それだにかく返し申すからには、聊かにて
 も謝禮を受くるはわが心にあらねど餘りに餘儀なくのた
 まへば、さらば鳥目二百文を賜へ。これは今夜休むべき所を、
 こゝまで追ひかけ來れる賃錢なり。わが取るべき錢なれば
 申し請くべし。」といひて、二百文を懐にして歸らんとす。

一兩 四歩。

飛脚は感に堪へかねて、その氏素性を尋ね問ふに、名ある者にあらず。又何一つ知れる者にあらず。只わが在處の近くに小川村といふ處あり。そこに與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふことをす。某も折節行きて聞き申したるに、親には孝を盡すべし、主人は大切にすべきものなり、人の物は取らぬものなり、無理非道は行ふべからずなどいふこと、常に語り給ふにより、今日の金子も、わが物にあらざれば取るべき理なしと心得たるまでの事なり。といひすてて歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さてもこの度は辛き命活きのびて、各方にも對面することを得たりとて、ありし次第を委しく語りけり。

蕃山をりふし田舎よりのぼり居て、學問修業の最中なりけるが、この物語を聞きて、その人こそ誠の儒といふものなれとて、翌日すぐに江州に行きて、小川村に藤樹先生を尋ねて隨從を願ひたるに、人に教へ申すほどの學徳なし。とて、更に許し給はず。蕃山ひたすらに願ひて、二日が間、先生の門にたゞずみて歸らず。先生の老母これを氣の毒がり、よしや、まづ内に入れ申せよ。とあるに、辭みがたくて入れ、遂に師弟の契約をせられけりとぞ。

その後、先生を備前侯の招き給へる時、その身は病身なりとて固く辭し、門人熊澤といふものあり。御役にも立つべきものなり。とて蕃山を出されけり。いづれも格別のことなり。

―東遊記―

備前侯 備前國岡山の城主
池田新太郎少將光政。天
和二年(二三四二)歿、年
七十四。

○ (前略)後、一士人アリ。ソノ墳墓ヲ弔ハントシテ路ヲ農夫ニ問フ。農夫耒耜ヲ舍テ、趨リテ舍ニ入り、服ヲ更メテ先導シ、跪拜洒掃スルコト甚ダ恭シ。士、心ニコレヲ訝リ、問ヒテ曰ク、爾、先生ニ於ケル何ノ親故カアルト。農夫曰ク、闔郷先生ヲ欽仰スル者、豈惟吾ノミナランヤ。吾ガ里ノ父子孝慈ニ、夫婦恩アリ、室ニ怒罵ノ聲無ク、面ニ和煦ノ色アル者ハ、職トシテ、先生ノ教ニコレ由ル。一人トシテソノ恩ヲ戴カザル無キナリト。士人、容ヲ動カシテ曰ク、嗟乎、吾乃チ今ニシテ近江聖人ノ稱ノ虚ナラザルヲ知ルナリト。乃チ敬拜シテ去レリ。

熊澤伯繼、京師ニ遊ビ師ヲ求ム。偶、共ニ投宿セシ者ノ

語ヲ聞クニ、曰ク、僕、主翁ノ爲ニ二百金ヲ齎シテ遠行シ、途ニテ驛馬ニ跨リ、金ヲ鞍ニ繫ケテ、コレヲ收ムルヲ忘レ、宿ニ投ジテ始メテ覺ル。コレヲ求ムルニ道無ク、將ニ縊死セントス。夜半ニ馬夫來リ還ス。僕驚喜シテ、十六金ヲ以テコレニ謝ス。受ケズシテ曰ク、遺物ヲ還スノミ、何ノ報ユルコトカコレ有ラン、但ダ夜ヲ冒シテ來ル、二百錢ヲ得バ足ルト。コレヲ強フレドモ聽カズ。曰ク、吾ガ里ニ中江先生有リ、平居吾ガ輩ヲ訓誨セラル、若シ賜フ所ヲ受クレバ、則チ先生ニ負クコトヲ爲スト。言ヒ畢リテ去レリ。噫、澆世安ソズ斯ノ人アルヲ得ンヤト。伯繼傾聽スルコト良久シクシテ曰ク、化賤隸ニ及ブ。中江氏ノ德、想ヒ見ルベシ。コレ眞ニ吾ガ師ナリト。乃チ近江ニ行キ、

誨一クワイ

中江原ヲ訪フ。原固辭シテ見エズ。伯繼曰ク、弟子固ヨリ
教フルニ足ラザルナリ。然レドモ官ヲ釋テテ百里庭ニ
趨レリ。縦ヒ先生竟ニ弟子ヲ教ヘズトモ、幸ニ一タビ顔
色ヲ望見スルヲ得バ、吾ガ願足レリト。原、見ユルコトヲ
許ス。因リテ從ヒテ業ヲ受ケンコトヲ請ヒ、居ルコト數
年、學大イニ進ム。是ニ至リテ、光政、京極高通ニ因リテコ
レヲ招ク。原モ亦コレヲ薦ム。遂ニ再ビ備前ニ還レリ。

原文漢文 一(鹽谷世弘、昭代記)一

鹽谷世弘 號は岩陰。江戸
の人。幕府の儒官。慶應
三年(二五二七)歿。年五
十九。

三三 縮むものの力

相馬 御風

故人石川啄木の歌に、

一晩に咲かせて見んと梅の鉢を火にあぶりしが

咲かざりしかな。

といふのがある。此の歌を私は時々思ひ出して口ずさむが、
其の度に私は先づ此の一首の歌に籠められた作者の皮肉
な心持に一種の軽い苦笑を誘はれるのである。併し、其の苦
笑感に忽ちにして作者その人に對する痛ましさの感じに
變つて、私を深い憂鬱にさへ陥れる事があるのである。

「何といふ痛ましい焦燥であらう。」かう私の心が叫ぶと同
時に、私は石川啄木その人の、あの晩年の苦悶生活の底知れ

相馬御風 名は昌治。明治
十六年新潟縣に生る。詩
人。評論家。

石川啄木 名は一。岩手縣
の人。歌人。明治四十五
年歿。年二十七。

ぬ暗さを思ひやらすには居られぬのである。花は咲くべき時に到らなければ決して咲かない。咲くべき内部の力が充實し切つた瞬間に達しなければ、花は決して咲きはしない。それを火に炙つてまでも無理に咲かせようとして焦り狂つて居る其のいらだたしい心、それほど悩ましい心が又とあらうか。

それに就いて思ひ出すのは、嘗て私は長い北國の冬籠の侘しさの中に在つて、鉢植にして置いた雛菊の花の只一輪開くのを見ただけの事によつて、限りなく大きな歡を與へられた事に就いてである。私は其の時の經驗について、當時次のやうな事を何かに書きつけたと記憶する。

ほんのりと雪あかりのさして居る窓際の臺の上に置いた鉢植の雛菊が、漸く一輪だけ咲いた。如何にも柔かさうな緑の葉の間から、二寸ほどの莖を眞直に伸ばして、其の上に白い小さな花が小首をかしげながら咲いて居る。僅かに此の小さな一鉢の春の草を眺めて居るだけでも、私に取つては測り知るべからざる歡がある。花は無論部屋のぬくみがあればこそ咲いたのだ、併しまた、それは單にぬくみだけで咲いたのではない。曇硝子を透して來る光線も無論それに與つて居るけれども、花はやはり花それみづからの生命の力の充實を待つて始めて開いたのだ。外からの力が如何に加はつても、内なる生命の充實を得なければ花は咲かない。花の開く其の最後の一瞬間の生命の充實——それを私は

始めてしみく、と見入る事が出来た。僅かに一つの小さな鉢に植ゑられた此のさゝやかな生命あるものの働によつて、私の書齋全體が如何に活氣づけられたことか。花が咲いた、花が咲いた。子供達までが此の小さな一輪の花の咲いたことによつて、躍り上らんばかりの歡を與へられたのである。

躍る—をどる

私は今かうした其の時の私の氣持と、前に掲げた病詩人啄木の歌に籠められた悲痛な心とを比べて、今更のやうに深く考へさせられるのである。

「縮むものに弾力あり。」——私達はさうした言葉を耳にすることがある。さうして、それによつていつも深く自らを警

縮む—ちぢむ

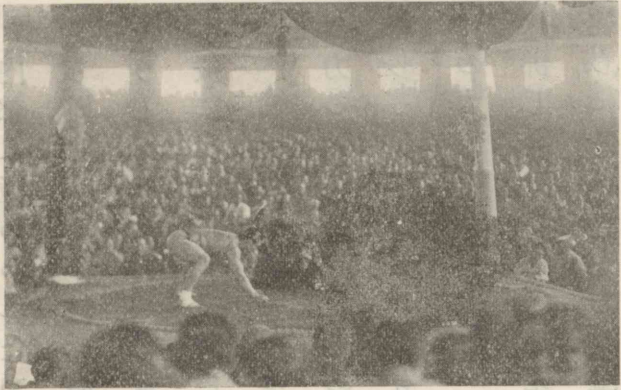
められて居るのを覚える。だが、私はそれを儼然たる一箇の事實として私の心眼に見せられたのは、前述の私の經驗に依つてであつた。

固く結んだあの小さな花の蕾の中に籠められた偉大な生命の力。それを感じさせられたあの瞬間の私の感激は、全く何といつて見やうもなく尊いものであつた。外に向つて花と開く力は、實に内に向つて貯へられるだけ貯へられ、籠められるだけ籠められた力の極致である。堅い地面を破つて小さな物の種の芽の伸び出る力、厚い殻を破つて卵の中から禽鳥の生れ出る力、何れも決して外に出ようとのみ焦り立つ力ではなくして、内に籠れるだけ籠つた力のおのづからなる爆發に外ならぬ。

縮めるだけ縮んだものの中に充實しきつた力こそ、此の世にあつての最も偉大な力ではないか。そんな事を私は同時に考へさせられたのであつた。

以前から私は角力を見るのが好きであつた。併し、角力を見てゐて私の最も壯快に感ずるのは、二個の人物の闘つて居る状態や勝負の如何であるよりも、二人の力士が互に睨み合つたあの瞬間の緊張味である。土俵の真中で二人の力士の睨み合つた瞬間に於ける肉體の緊張ほど美しい人間の肉體を、私は他に見る事が出来ない。不斷見ると馬鹿馬鹿しいまでに大きな體の持主である其の人も、あの瞬間に於てのみは少しも大きいといふ感じがしない。縮まれるだ

け縮まつて居る。肉體のあらゆる部分に力が充實して、凡べ



とを注意して比べて見給へ。其の間に何といふ驚くべき相

挿繪 力士の睨み合つた瞬間。

違の存することであらう。其の間に、
 内部に籠められた力に於て勝る時、人は往々戦はずして
 勝ち鬪はずして他を服させることが出来る。西行法師を打
 たうとした荒行者文覺が、西行法師の姿を見ただけで、其の
 尊嚴に打たれて平伏したといふ話もある。徒らに外部へ外
 部へと現れ出る諸々の力よりも、内に籠つて「信」となつた靈
 の力の如何に偉大であるかに就いての實話は、昔から數多
 くある。私達はそこにも能く縮むものの弾力の強さを認め
 るのである。

併し、今日の社會を見渡す時、私達は餘りに多くの人々が、
 徒らに外部への力の濫費をしつゝあるのを見る。かの石川
 啄木の歌のやうに、まだ咲くだけの力の充實に達しない花

文覺 俗名遠藤盛遠。鎌倉
 時代の僧。正治元年（一
 八五九）寂、年八十。
 西行法師 俗名佐藤義清。
 鎌倉時代の歌僧。建久元
 年（一八五〇）寂、年七十
 三。

の蕾を火に炙つてまでも咲かせようとして居るやうな焦
 燥に、餘りに多くの人々が煩はされ過ぎて居る。安價な力の
 表現の如何に多過ぎることよ。此の意味に於て、私達は現代
 の社會に向つて、經濟上の緊縮以上に、肉體上の、又精神上の
 力の緊縮の必要を感じず。能く縮むものの強き弾力、それが
 今の社會には甚だ乏しい。角力ていふならば、睨み合ひが十
 分でない。ろくに睨み合はない中にいゝ加減に角力を取つ
 て居るやうな人が餘りに多い。力を外へ働かすことばかり
 に焦燥してゐて、内に力を充實させることを忘れて居る。根
 強い働きがなく、奥深い思考がない。つまり底力のある人や
 底力のある働きに乏しいのである。

いといふことである。言ひ換へれば眞の緊縮と充實とがな
いといふことである。

私達はよく子供の頃、腕を糸で縛つて、その糸が力瘤を入
れる事によつて切れるか切れないかを試したものである。
内に充ちた力が、外に現れる力よりも強いことは、そんな例
によつても分る。縮むものに弾力あり。といふ一語は、現代人
殊に現代の若い人々によつては、最も意義ある金言ではあ
るまいか。緊縮しきつた力の充實しきつた筋肉は、強い矢を
さへも撥ねかへす。よく縮むことによつてよい充實を得た
所にこそ、自らなる眞活動がはじめられるのである。

―静と動との間―

二三 雲萍雜誌抄

柳澤 洪園

ある人時刻を知らん爲にとて、自鳴鐘を求めんとするを、
その妻之をとゞめていひけるは、明けくれにかくる世話の
みにあらず、くるひたる折からにはその隙を費し、自鳴鐘の
ために、かへりて時を失ふこと多からん。やめ給へ。といへば、
「さあらば雞を飼ふべし。」といふに、その妻又とゞめて云ひけ
るは、時刻は人のうへにあり。汐の満干もこれとおなじかる
べし。自鳴鐘雞を便りとするは、勤めに怠るものゝいたすこ
となり。と夫を諫め、つひに雞をも飼はずなりにき。

一休禪師、紫野におはせしころ、人の書をもとむるものあ

柳澤洪園 名は里恭、字は

公美。大和郡山藩の家臣、
儒者。寶曆八年(二四一
八)歿、年五十三。

自鳴鐘 ジメイシヨウ。鈴
打ちの時計。



かくる (ねちを) かける。

一休禪師 禪宗の高僧。京
都大徳寺の住。文明十三
年(二四一)歿、年八十
八。

れば、御用心と書いて與へぬ。しひて他のことをもとむる者あれば、御用心々々と、いくつも書き給ひ、又上に、只といふ一字をそへて、只御用心とか、せ給ふこともありとかや。いとおもしろく、その語すべての事にかよひて、教訓とはなりにけり。予もまたそれにならひて、用心の二字を合はせて、一字に作り書けり。その文に云ふ、

鳥渡見れば忍ぶに類し、龜忽に見れば恩にひとし、はるかに見れば思ふに似たり。

天龍寺の觀道といふ僧これを見て、棄恩入無爲、眞實報恩者といふ文意に、何となくかよひてをかしといへり。

守邪とは、醫書の樞要にして、人の行ひにていはば、油斷せ

鳥渡 忍
龜忽 恩
はるか 思

天龍寺 京都市右京區嵯峨に在る禪宗の本山。夢窓國師の創建。

棄恩入無爲 一切の煩惱を斷つて「悟」を開くこと。

ざるなり。よろづの事も、みづからゆるす所よりして、よからぬことは出で来るなり。甚しく寒き時は、風邪にもおかされぬものなり。寒さのゆるみたる時に、邪氣に感冒するにて知るべし。これはさゝいなることとゆるす時には、や大惡のきざすもと思ふべし。邪も氣のゆるむとき入るなり。されば小事を守らざるが大事の始とこそ思ふべし。古歌に、
かばかりの事は憂世の習ぞと
ゆるす心の果てぞ悲しき。

—(雲萍雜誌)—

心胸には道理に知れない道理がある。
わたしたちは千百の事物に於て、その道理以外の道理を知る。(パスカル)

雲萍雜誌 四卷。柳澤淇園著「見聞漫錄」(二十卷)中から採録補訂したもの。
パスカル Pascal Blaise. (1623-1662) フランソワの幾何學者・哲學者。

二四 樂 訓

貝 原 益 軒

天地の御恵をうけて人となり、天地の御心をうけて心とせし人にしあれば、天地の御心にしたがひ、我が仁心を保ちて、常に樂しみ、溫和慈愛にして情ふかく、人をあはれみ恵み、善を行ふを以て樂しとすべし。人の惡を戒めんため、怒り詈るは、已む事を得ざればなり。常には和樂にして、其の氣を養ふべし。されど又和に專一にして禮なければ、一偏に流れ亂れて樂をうしなふ。

人のうれひ苦みを慮りて、人の妨となる事を施すべからず。常に心にあはれみありて、人を救ひめぐみ、かりにも人を

妨げ苦しむべからず。我ひとり樂しみて、人を苦しむるは、天の惡み給ふ所おそるべし。人と共に樂しむは、天のよろこび給ふ理にして、誠の樂なり。

人を恨み怒り、自らほこり、人をそしり、人の小なる過をせめ、人の言をとがめ、無禮をいかるは、其の器小なり。是れ皆樂を失へるわざなり。怒と欲とをこらへ、心を廣くして、人を責め咎めざるは、器大なるなり。是れ和氣をたもちて、樂を失はざる道なり。

心こゝに在らざれば、見れども見えぬ、目の前にみちく、
て、樂しむべき有様あるをも知らず。春秋にあひても感ぜず、

貝原益軒 名は篤信。文損軒とも號す。筑前の人。儒者。正徳四年(二三七四)歿、年八十五。

月花を見ても情なく、聖賢の書に向ひても好まず。唯私欲に
ふけりて、身を苦しめ、不仁にして、人を苦しめ、さがなく賤し
きわざをのみ行ひて、わづかなる命の内を、はかなく月日を
送ることをしむべし。

心明かにして、世の理をよく思ひ知り、物に情あらん人は、
我が心にある樂を知りて本とし、身の外、四よの時、折々につ
て、天地陰陽の道の行はるゝをもてあそび、天地の内なる萬
のありさまを見聞くに従ひて、耳目を悦ばしめ、心を快くし、
其の樂極りなくして、手のまひ足のふむ事を知らざるべし。

世の人、まどしくしては憂ひ苦しみ、富貴をうらやみて樂

まどしく 貧しく。

なく、富貴にしてはおごり怠りて、欲をほしいまゝにし、財を
つひやして樂を求むれど、欲にやぶられて、かへりて自らく
るしみ、人を苦しましむ。すべて富貴も貧賤も、其のねがひ外
にありて、内に道を得ざれば、苦のみにて樂なし。
もし此の理を知れらば、身の上につきて樂しみ、外を願ふ
べからず。貧賤にしても、患難にあひても、時となく所として、
樂あらずといふ事なかるべし。坐まには坐の樂あり、立たには立
の樂あり、行ゆにも、臥ふにも、飲食にも、見るにも、きくにも、ものい
ふにも、樂あらずといふ事なし。樂はもとより心に生れつき
て、身にそへるものなればなり。されど此の樂を知りて樂し
む人すくなし。理くられければ樂を知らず、欲ふかければ樂を
うしなふ。(貝原益軒の文による)

—樂訓—

二五 國語尊重

伊東 忠 太

我が國語は甚だ複雑な歴史を有する。大體に於て、その大部分は、太古から傳來した我が國固有の言語であるが、支那語をそのまま採用したもの、又はこれを日本化したものがあり、更に西洋諸國の言語から轉訛したものや、梵語系のものなどもある。

近來、世界の文運が急激に進展したのと、國際的交渉が忙しくなつたのとで、我が國でも舊來の言語だけでは間に合はなくなつた。殊に新しい専門的術語は、多くは、日本化することが困難であり、又不可能なものもあるので、外國語をそのまま、國語として使用してゐるのが澤山あるが、これは止む

伊東忠太 慶應三年（二五二七）米澤市に生る。東京帝國大學工學部出身。工學博士。東京帝國大學名譽教授、早稻田大學教授。

梵語 古代印度語。

術語 特殊の意味を有して學術上に用ゐられる語。

を得ないことであり、又少しも差支へないことである。併し、永く我が國に慣用された歴史のある言語は、十分にこれを尊重しなければならぬ。抑、國語は、國民の思想の交換・聯絡結合の機關で、國民の神聖な徽章であり、至寶である。不足な點は適當に外國語を以て補充して差支へないが、濫りに舊來の成語を捨てて外國語を用ゐるのは、取りも直さず自己を侮辱するもので、以ての外の妄舉である。就中、一國民の有する固有名は最も神聖なもので、些かも他から侵されてはならない。

我が國名はニホン又はニッポンである。これに對して、外國人は思ひ思ひに勝手に稱呼を用ゐてゐるが、それは外國人の自由である。併し、我が國民が外國人に追從して、自ら自

國の名を二三にするのは言語道斷である。英米人の前では
 ジャパンと稱し、佛人に逢へばジャポンと唱へ、獨人に對し
 てはヤパンといふが如きは、何たる陋態であらう。吾人は日
 常、英國をイギリス、獨國をドイツと呼ぶが、英獨人は吾人に
 對して自ら爾く呼ばないではないか。我が國民の中には、今
 日でも猶外國人に對して、臺灣をフォルモサ、樺太をサガレ
 ン、朝鮮をコレア、旅順をポート・アーサーなどと言ふ者があ
 るが、これは不見識の甚しいものである。

我が固有の地名を、外國になぞらへて呼ぶことも亦國辱
 であると思ふ。例へば、曾て日本を「東洋の英國」と誇り顔に唱
 へたこともあつたが、今でも飛彈と信濃との境を走る峻嶺
 を「日本アルプス」と呼び、木曾川を「日本ライン」と言ひ、更にそ

フォルモサ Formosa
 サガレン Saghalien
 コレア Korea
 ポート・アーサー
 Port Arthur

アルプス Alps
 中部歐洲の大山脈。
 ライン Rhine
 歐洲大河の1。

の或る地點を「日本ローレライ」などと名づけてゐるものが
 ある。

日本古來の地名を、郡・町・村等の改廢と共に變更するが如
 きことは止むを得まいが、古の地名に古の字音によつて當
 て嵌めた漢字を、濫りに今の音に改讀して、その結果、地名の
 改稱となるやうなことは、甚だ輕卒なことである。例へば山
 城のサガラは、最もこれに近い音を有する相樂の二字によ
 つて記されたのであるが、今はサウラクと呼んでゐる。伊賀
 の阿拜がアハイとなり、信濃の筑摩がチクマとなつたやう
 な例は、まだ幾らもあらう。この筆法で行けば、武藏はブザウ、
 相模はサウボ、因幡はインハンと改稱されねばならぬ筈で
 ある。

ローレライ Loreli
 ライン河中の1名所。

サガラ 京都府に屬する郡
 名且つ村名。

阿拜 三重縣に屬する昔の
 郡名。今では山田郡と合
 せて阿山郡といふ。
 筑摩 長野縣に屬する郡
 名。

かくの如く、我が國の固有名、殊に地名が無反省に改められることの非は言ふまでもないが、こゝに寒心すべきは、吾人の日用語が漫然と歐米化されつゝあるの事實である。これは日常の會話や新聞記事などにも無數に發見される。例へば、何々日といふ代りに何々デーといふ惡習が一部に行はれてゐる。態「デー」と言はずとも、日といふ美しい簡単な固有の國語があるのである。又、父母は、とうさまかあさまと呼んで何の差支へもないばかりでなく、大いに親愛の情が籠つてゐるのに、何を苦しんでパパ様・ママ様と和洋折衷を敢へてするのか。此等は總て自ら國語を蹂躪するものであると思ふ。

翻つて歐米諸國の實狀を見れば、さすがに國語は飽くま

でもこれを尊重し、英米の如きは到る處に國語の振張を計つてゐるのである。獨逸でも、曾てラテン系の言葉を節制してなるべく自國語を使用することを奨励したことがある。果してどれだけそれが勵行されたかは知らないが、その意氣は壯とすべく、又これ當然の主張といふべきである。

私は曾て土耳其に遊んで、その宮廷の常用語が自國語でなくして佛國語であるのを見て、吃驚したことがある。又印度では、地理や歴史などの關係から、北部と南部とでは根本から言語が違つてゐるので、印度人同士が英語で話し合つてゐるのを見たが、印度が到底獨立國たり得ない所以の第一は、恐らく、この自國語によつて全國民の聯絡が取れてゐないといふ點にあるだらうと感じた。

ラテン(Latin)系 イタリ
ア・フランス・スペインな
どの國々に行はれてゐる
言語の屬する言語系統の
名。

昔、支那に於て、塞外の鮮卑族に屬する拓跋氏が、中國に侵入し、黃河流域の全部を占領して國を魏と稱したが、魏は漢民族の文化に惑溺して、自ら固有の風俗習慣を改め、固有の言語、服裝を替へて、姓名さへも漢式に倣つた。果然、彼は幾許もなくして漢族の亡ぼす所となつた。なほ、獨り拓跋氏のみならず、支那塞外の蠻族は概ねその轍を履んでゐるのである。

我が日本民族は、炳乎たる獨特の文化を有してゐる。素より拓跋氏や土耳其人などの比ではない。宜しく自國の言語を尊重して、飽くまでこれを徹底させ繁榮さすべき覺悟がなければならぬ。然るに、今日の我が國の状態は如何であるかといふに、外國語の研究が實に盛んで、動もすれば外國語

鮮卑族 支那の北狄（北方蠻族）の一種族で、後漢の末に大いに興隆したものの。
拓跋氏 鮮卑族中、最も勢力のあつたものの一。
黃河 支那第二の大河。崑崙山中に發源し、甘肅・山西・陝西（センセイ）・河南・山東の諸省を経て渤海に注ぐ。流程四、一〇〇軒。
魏 拓跋珪が、我が仁徳天皇の七十四年（二〇四六）に建てた國名。

崇拜の傾がありはしないかと思ふ。かくして若し漫然と我が國語を捨てて、外國語を濫用して得意とするが如きことがあつたならば、その結果は如何であらう。それは明かに一種の國民的自滅であると言はなければならぬ。であらう。若し、英米覇を稱すれば、靡然として英米の語を操り、獨佛勢力を得れば、倉皇として獨佛の語を用ゐるといふやうであるならば、吾人何を以て我が獨立國としての體面を維持することが出来るであらうか。

畢竟、私の切に希ふところは、我が同胞が互に相警めて、飽くまで我が國語を尊重することである。

—木片集—

改制中等新國文卷二終

國語に於ては、音節の強弱は、アクセントの強弱に依る。アクセントの強弱は、音節の強弱に依る。アクセントの強弱は、音節の強弱に依る。アクセントの強弱は、音節の強弱に依る。アクセントの強弱は、音節の強弱に依る。アクセントの強弱は、音節の強弱に依る。アクセントの強弱は、音節の強弱に依る。アクセントの強弱は、音節の強弱に依る。アクセントの強弱は、音節の強弱に依る。アクセントの強弱は、音節の強弱に依る。

國語のアクセント

一 音 節

アクセントといふのは、一つの語の中の或部分が他よりも強調されることであるから、先づ語を組成してゐる音節について知らねばならぬ。音節について 種々の見方があるが、今假りに文字一字であらはされるものを一音節と見るとと定める。

長音はどういふ書き方をしたものでもこれを二音節に數へる。
 促音も一音節と數へる。

拗音は普通二文字で表記されるが、これも一

國語のアクセント

音節と數へる。

一音節 エ(繪) キ(木)

二音節 ヤマ(山) ハナ(花)

三音節 カキネ(榎根) キモノ(着物)

四音節 ユフガタ(夕方) キャウダイ(姉妹)

妹)

五音節以上 オトウサン(お父さん) イッ

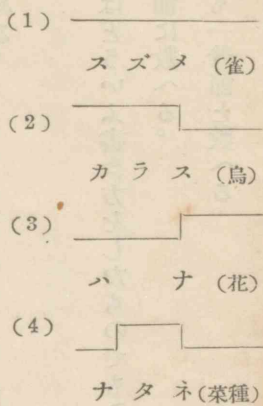
シャウケンメイ(一生懸命)

二 アクセント

言葉に於て、二つ以上の音節が連なつて發音せられる時、その或物がその他のものよりも高く或は強くひびく事がある。この高低強弱の關係をアクセントといふ。

アクセントには左の四通りが數へられる。

一



- (1) 始から終りまで同様の高さのもの。
- (2) 高まりが始の方にあるもの。
- (3) 高まりが終の方にあるもの。
- (4) 高まりが中部にあるもの。

三 アクセントの表し方

國語では、アクセントを表すには語中の高くなる所だけ右傍一線を引いてこれを示すが普通である。その音の高い部分の一つの音節だけに

四 アクセントの地方的相違

とゞまることもあり、二つや三つの音節にわたつてゐることもある。

オモテ | アサガホ

國語のアクセントハ各地方によつて必ずしも同一でない。例へば、

東京	京都	土佐	長崎
箸	ハシ	ハシ	ハシ
橋	ハシ	ハシ	ハシ
端	ハシ	ハシ	ハシ

のやうに様々であるので、大體東京の言葉を中心にして標準のアクセントを決めるのである。

大正十年十月廿一日印刷
 昭和四年二月十五日訂正六版發行
 昭和九年十一月三十日訂正七版發行
 昭和十年十二月三日訂正七版發行
 昭和十年十月十六日訂正八版發行



改制中等新國文 全十冊
 定價各冊 金五十八錢

編纂者 故三矢重松
 右相續者 三矢夏井
 補訂者 鳥野幸次
 補訂者 折口信夫

發行者 東京市神田區美土代町十八番地 株式會社 文學社
 印刷所 東京市本郷區區尾砂町三十六番地 日東印刷株式會社

發兌 東京市神田區美土代町十八番地 株式會社 文學社

關西一手販賣所 大阪市西區靱北通り二丁目 株式會社 盛文館

電話 振替 貯金 口座 大阪七四三番



第一卷
小林豊